根 来 寺 坊 院 跡

昭和60年度

和 歌 山 県 教 育 委 員 会

例　　言

1．本書は、国庫補助事業、昭和60年度根来寺坊院跡発掘調査の概報である。

2．発掘調査は、社団法人和歌山県文化財研究会に委託し、実施した。

3．本書の遺構写真は村田弘、窪田雅秀が、遺物写真は辻林浩、窪田が撮影した。

4．遺物の実測は辻林、村田があたり、遺物・遺構のトレースには辻林、村田、窪田があたった。

5、本書の作成には、上野道代、日高葉子、永尾弘子が協力し、辻林、村田、窪田が執筆し、辻林が編集した。

6．本書の遺物実測図と遺物図版に付した番号は一致する。ただし、遺物図版にある4桁の数字を付したものは写真だけである。

調　査　組　織

調査委員

岡田　英男　（和歌山県文化財保護審議会委員）

羯磨　正信　（　　〃　　）

巽　　三郎　（　　〃　　）

都出比呂志　（　　〃　　）

藤沢　一夫　（　　〃　　）

安原　啓示　（　　〃　　）

調査員

辻林　　浩　（和歌山県教育庁文化財課主査）

村田　　弘　（社団法人和歌山県文化財研究会技術員）

調査補助員

窪田　雅秀

事務局理事　梅村　善行　（和歌山県教育庁文化財課課長）

局長　垣内　　茂　（和歌山県文化財研究会事務局長）

次長　北野　全美　（和歌山県教育庁文化財課主幹）

幹事　桃野　真晃　（　　〃　　第2係長）

主任技術員　吉田　宣夫　（　　〃　　主査）

松田　正昭　（　　〃　　）

書記　今田　一里　（　　〃　　主事）

目　　次

Ⅰ　調　査……1
Ⅱ　遺　構……2
　1　第1次A調査区の遺構……2
　2　第1次B調査区の遺構……10
Ⅲ　遺　物……14
　1　第1次A調査区の遺物……14
　　a　第1層出土の遺物……14
　　b　第2層出土の遺物……14
　　c　第3層出土の遺物……14
　　d　第4層出土の遺物……14
　　e　遺構出土の遺物……14
　2　第1次B調査区の遺物……18
　　a　表土・床土出土の遺物……18
　　b　第1層出土の遺物……18
　　c　第2層出土の遺物……18
　　d　第3層出土の遺物……19
　　e　遺構出土の遺物……20

図　目　次

第1図　遺跡の範囲
第2図　山内地形図
第3図　NG85－1次A区　遺構平面図
第4図　NG85－1次A区　SE－01実測図
第5図　NG85－1次B区　遺構平面図
図1　1次A区　包含層出土遺物実測図
図2　1次A区　包含層出土遺物実測図
図3　1次A区　遺構出土遺物実測図
図4　1次A区　遺構出土遺物実測図
図5　1次A区　遺構出土遺物実測図
図6　1次A区　遺構出土遺物実測図
図7　1次A区　遺構出土遺物実測図
図8　1次A区　遺構出土遺物実測図
図9　1次A区　遺構出土遺物実測図
図10　1次A区　遺構出土遺物実測図
図11　1次A区　遺構出土遺物実測図
図12　1次B区　包含層出土遺物実測図
図13　1次B区　包含層出土遺物実測図
図14　1次B区　包含層出土遺物実測図
図15　1次B区　包含層出土遺物実測図
図16　1次B区　包含層出土遺物実測図
図17　1次B区　包含層出土遺物実測図
図18　1次B区　包含層出土遺物実測図
図19　1次B区　遺構出土遺物実測図
図20　1次B区　遺構出土遺物実測図
図21　1次B区　遺構出土遺物実測図
図22　1次B区　遺構出土遺物実測図
図23　1次B区　遺構出土遺物実測図

図　版　目　次

図版１　１．１次Ａ区　全景（北から）
　　２．１次Ａ区　全景（北から）
図版２　１．１次Ａ区　ＳＧ－01（西から）
　　２．１次Ａ区　ＳＦ－01（東から）
図版３　１．１次Ａ区　ＳＶ－01（南から）
　　２．１次Ａ区　ＳＤ－15（南から）
図版４　１．１次Ａ区　ＳＥ－01（北から）
　　２．１次Ａ区　ＳＢ－01（北から）
図版５　１．１次Ｂ区　全景（上方から）
　　２．１次Ｂ区　全景（上方から）
図版６　１．１次Ｂ区　全景（北から）
　　２．１次Ｂ区　ＳＥ－01（東から）
図版７　１．１次Ｂ区　瓦列（南から）
　　２．１次Ｂ区　ＳＤ－08（西から）
図版８　１．１次Ｂ区　ＳＤ－01（西から）
　　２．１次Ｂ区　土器溜（西から）
図版９　１次Ａ区　包含層出土遺物
図版10　１次Ａ区　包含層出土遺物
図版11　１次Ａ区　包含層・遺構出土遺物
図版12　１次Ａ区　遺構出土遺物
図版13　１次Ａ区　遺構出土遺物
図版14　１次Ａ区　遺構出土遺物
図版15　１次Ａ区　遺構出土遺物
図版16　１次Ａ区　遺構出土遺物
図版17　１次Ａ区　遺構出土遺物
図版18　１次Ａ区　遺構出土遺物
図版19　１次Ａ区　遺構出土遺物
図版20　１次Ａ区　遺構出土遺物
図版21　１次Ａ区　遺構出土遺物
図版22　１次Ａ区　遺構出土遺物
図版23　１次Ａ区　遺構出土遺物
図版24　１次Ａ区　遺構出土遺物
図版25　１次Ａ区　遺構出土遺物
図版26　１次Ａ区　遺構出土遺物
図版27　１次Ａ区　遺構出土遺物
図版28　１次Ｂ区　包含層出土遺物
図版29　１次Ｂ区　包含層出土遺物
図版30　１次Ｂ区　包含層出土遺物
図版31　１次Ｂ区　包含層出土遺物
図版32　１次Ｂ区　包含層出土遺物
図版33　１次Ｂ区　包含層出土遺物
図版34　１次Ｂ区　包含層出土遺物
図版35　１次Ｂ区　包含層出土遺物
図版36　１次Ｂ区　包含層出土遺物
図版37　１次Ｂ区　包含層出土遺物
図版38　１次Ｂ区　包含層出土遺物
図版39　１次Ｂ区　包含層・遺構出土遺物
図版40　１次Ｂ区　遺構出土遺物
図版41　１次Ｂ区　遺構出土遺物
図版42　１次Ｂ区　遺構出土遺物
図版43　１次Ｂ区　遺構出土遺物
図版44　１次Ｂ区　遺構出土遺物
図版45　１次Ｂ区　遺構出土遺物
図版46　１次Ｂ区　遺構出土遺物
図版47　１次Ｂ区　遺構出土遺物
図版48　１次Ｂ区　遺構出土遺物

Ⅰ 調 査

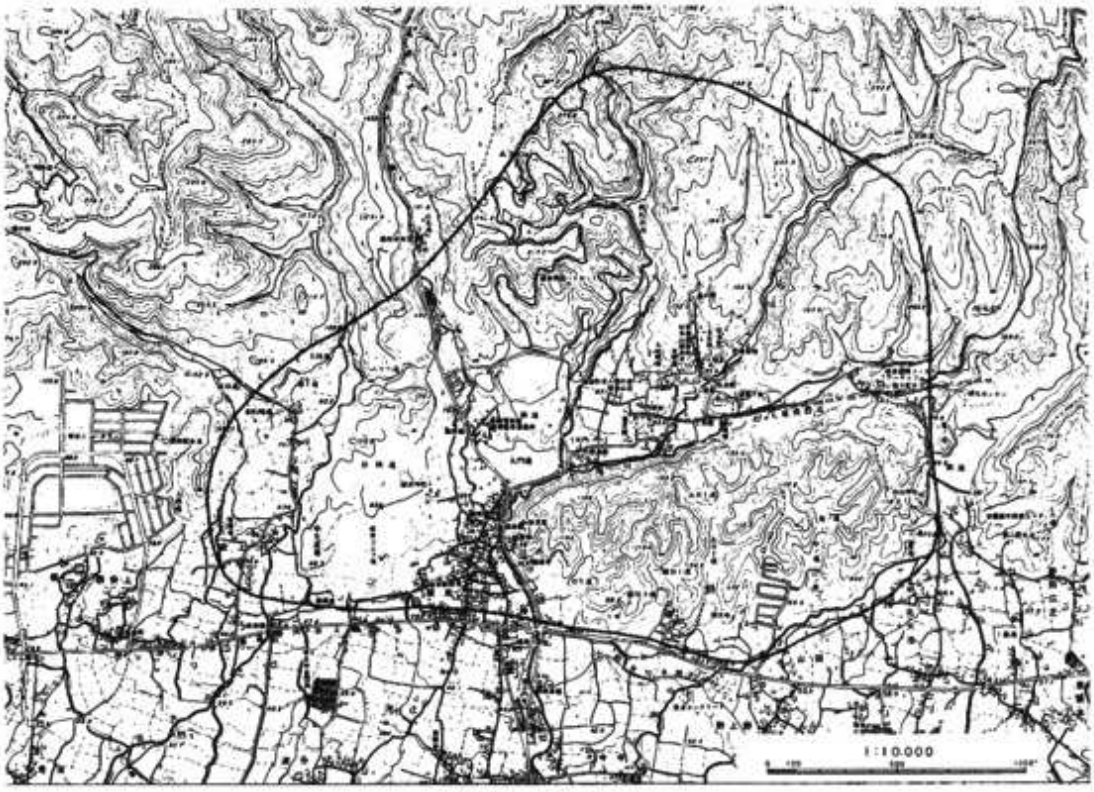
本年度は山内１ヵ所の発掘調査を実施した。

調査地点は、寺域の中心をなす平地部のほぼ中央部にあたり、開山の地円明寺とは道路を挟み南接する現律乗院の東側の水田３枚である。

この地区を発掘調査の対象として選んだ理由は、昭和55年度から工事が中断している大規模農道の建設が再浮上してきたことにより、これに対処する資料を得るためのものである。

本年度は３枚の水田を調査したが、現律乗院に東接する一段高い水田をＡ区とし、これに東接する水田をＢ区とした。これら水田と現律乗院の南辺には江戸時代の所産と考えられる高さ約２メートルの石垣が現存し、道路跡と考えられる水田跡が石垣前面にみられる。

調査の結果、Ａ区東辺から約２メートル西よりに天正の兵火時にかかる塔頭寺院の敷地の東辺をなす南北に延びる石垣が検出され、江戸時代の再建に際しても大幅な敷地の変更がなかったことが判明した。なお、天正の兵火時にかかる寺院敷地は、現律乗院の地下に及ぶものと考えられる。Ｂ区は、Ａ区塔頭寺院の約半分の敷地面積しかもたず、検出遺構には通常の塔頭寺院にみられるような日常生活をにおわす遺構が認められず、敷地一杯に建物が建つことから、客坊的性格を有する区画であろうと推測される。



第１図　遺跡の範囲

Ⅱ 遺 構

1 第1次A調査区の遺構

本調査区は根来寺開山の地とされる円明寺に近接する。また、江戸時代の再建後その復興を担ったとされる律乗院に隣接するなど、古くから根来寺の中心として栄えたと考えられる地域に位置する。調査は現地形の水田1枚分を対象として実施した。その結果、再建後の江戸時代の遺構、天正の兵火にかかる時期の遺構、それ以前の遺構と3時期以上にわたる遺構を検出し、当地域が古くから連綿として塔頭寺院の営まれた地であったことを窺せるに足る成果を得た。

以下、今次の調査で検出した主要遺構についてその概要を記し、若干の考察を加えたい。

a 江戸時代の遺構

遺構の大部分は、床土直下の面で検出した。この期のものとしては、池、溜桝、埋桶、溝などがある。

池（ＳＧ—01） 直角三角形に近い形状をなす池で、一辺5～7メートル、深さ約50センチメートルを測り、周囲は割石積みである。石積みの基底部には、径10センチメートルほどの松丸太を胴木として使用している。覆土は上層から淡黄褐色土、灰色弱粘質土、灰色砂質土の3層で、レンズ状の堆積を示す。

溜桝（ＳＦ—01） 長辺3メートル、短辺2メートル、深さ 0.8メートルを測る遺構である。東側は地山を壁とするが、他の3辺は割石積みである。東南隅には5本の丸太杭が打ち込まれており、この部分が流入口あるいは排水口となるものと考えられる。

埋桶—01 長径85センチメートル、短径65センチメートルの小判形を呈し、側板下位と中位には箍がめぐらされていた。底板は、2枚の板を竹釘により3箇所で接合している。

埋桶—02 径80センチメートルを測るもので、遺存状態が悪く底板だけの検出である。

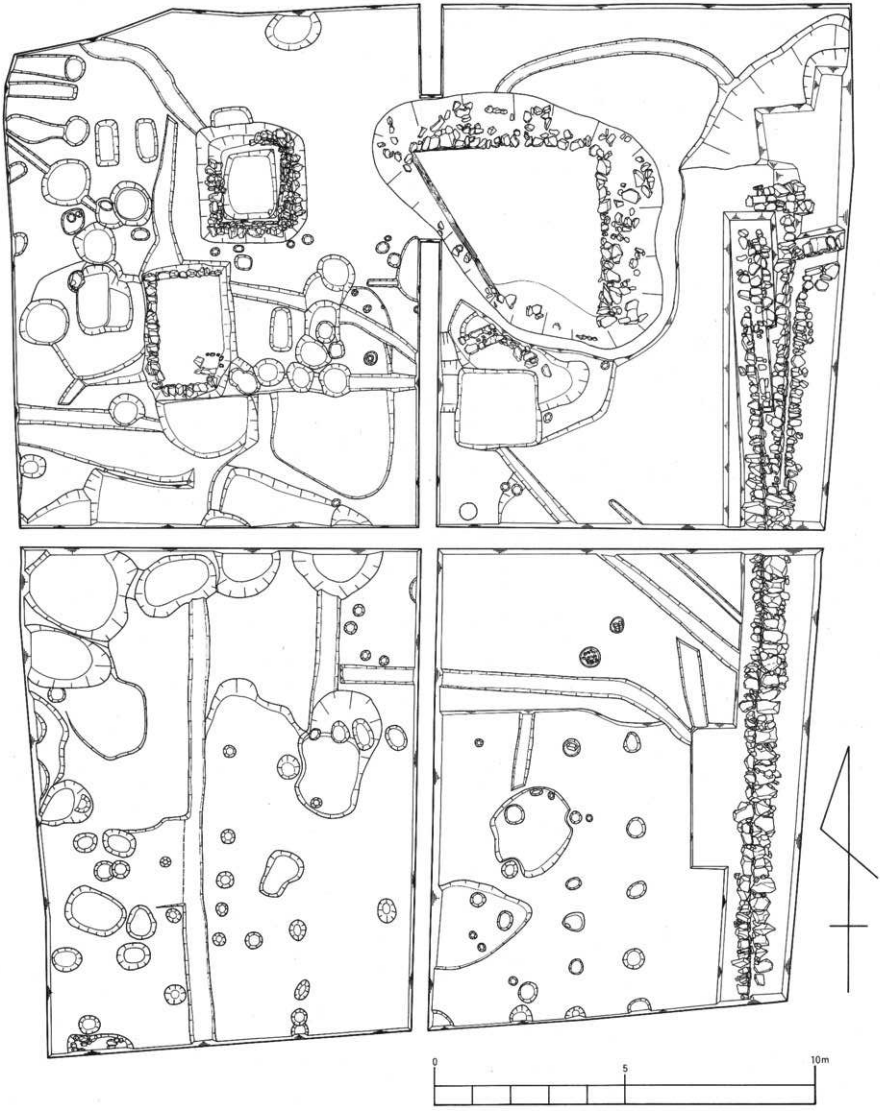
溝（ＳＤ—06） 調査区の東側をほぼ南北に走る幅約40センチメートルの溝で、後述する天正の石垣（ＳＶ—01）を西側壁として再利用したものである。50センチメートル前後の大きな石を石垣に斜めに立てかけるようにして蓋石としている。その規模、造作の様子からして、当塔頭寺院の幹線的機能を担った暗渠排水溝であったと考えられる。

溝（ＳＤ—10） 幅約30センチメートルの石を乱雑に投げ込んで造られた暗渠排水溝である。調査区を北西方向に走り、ＳＤ—05へつながる。

溝（ＳＤ—11） ＳＤ—10と同様の暗渠排水溝で幅約40センチメートルを測る。掘り方の深さは15センチメートル前後を測り、調査区を南北に走る。

以上述べたこれらの遺構は、すべて同時期のものではなく、2時期ないし3時期にわたるものである。ただし、個々の遺構出土の遺物を検討すれば、いずれも江戸時代中期以前まで下るもの

第2図　山内地形図



第3図　NG85－1次A区　遺構平面図

はなく、兵火後の再興は当地区においても江戸時代中期をまって始まったことが知られる。

b　天正の兵火にかかる時期の遺構

井戸（ＳＥ—01）　第４図に示した方形の井戸である。長辺 2.1メートル、短辺 1.6メートル、深さ 1.4メートルを測る。北西隅は近世の土壙（ＳＫ—05）によって攪乱を受けている。掘り方は二段掘りとなっており、上段は割石積み、下段は素掘りとなっているが、東南隅に丸太杭が残っていることからおそらく本来は木枠等の施設があったものと考えられる。覆土は上段部に相当する約90センチメートルの厚さに焼土が堆積していた。出土していた遺物からこの焼土は天正の兵火によるものと判断され、兵火によって廃絶した井戸であることが判明した。

石垣（ＳＶ—01）　当塔頭寺院の東側を画する石垣である。基底部から検出面までの高さは、北側で0.5メートル、南側では1.5メートルを測る。北側ではわずかに方向を西に振っており、また、石の積みもやや異なりを見せることなどから、前述したように再建後の暗渠として再利用をはかった際、石の積み替えを行った可能性もある。

甕ピット　ＳＥ—01の南側で検出した逆Ｌ字状の土壙群である。いずれもすでに甕は抜き取られており掘り方のみの検出であるが、その大きさから推して２～３石入りの法量の異なった甕を組み合せて使用していたものと考えられる。通例、甕ピットは井戸の付近にあり、井戸との関連が重視されているものであるが本例もその例外ではない。

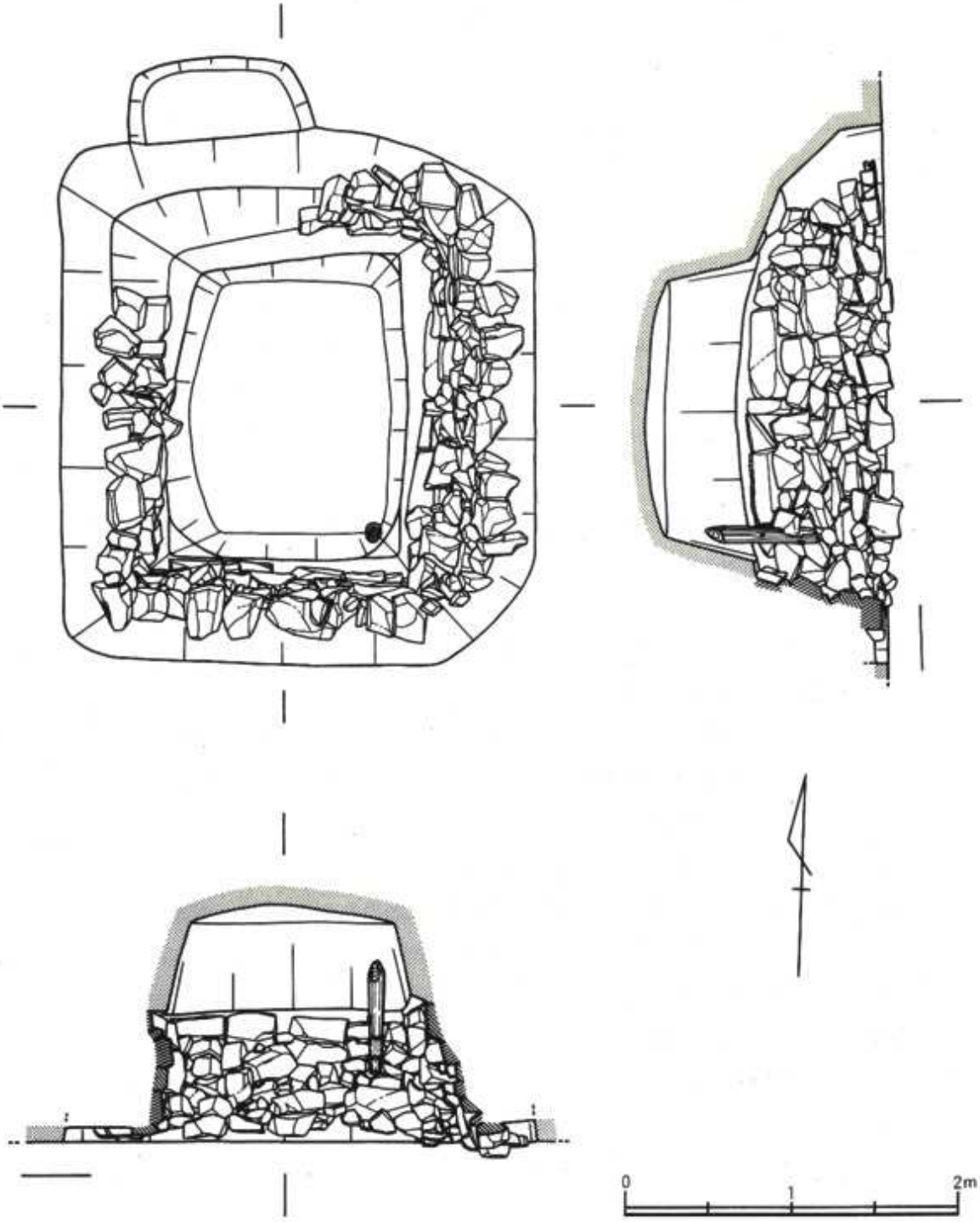
溝（ＳＤ—08）　ＳＤ—12を切って南北に走る溝である。幅約40センチメートル、深さ約10センチメートルを測る。覆土中から古手の白磁碗（196）が出土している。

溝（ＳＤ—12）　調査区南側を東西に走る溝である。幅約40センチメートル、深さ約30センチメートルを測る。一部抜き取られているものの両側は一段の石組みである。覆土は上層が天正の兵火時の焼土、下層は灰色の砂質土である。後述するＳＢ—01の北側を画する溝と考えられる。

溝（ＳＤ—15）　石垣東側の一段下った面で検出した石組みの溝である。幅約20センチメートル、深さ約40センチメートルを測る。出土遺物には須恵質こね鉢、備前焼Ⅵ期に該当するスリ鉢などやや古い時期の遺物が多く見られるが、口縁部の肥厚する土師質の皿も含まれているところから兵火時にかかる遺構と判断した。調査区北側でほぼ直角に折れ曲り、東へと延びる。おそらく東接するＢ区で検出したＳＤ—05へとつながるものであり、Ｂ区の西側を画する溝であろう。

建物跡（ＳＢ—01）　前述したＳＤ—12より南に拡がるピット群を掘立柱の建物跡と想定したものであるが、整然とした並びを確認したものではない。僅かに東側の並びから南北４間に復原することができる。南北のセクションベルトをはさんで西側にも柱跡と思われるピット群が拡がっており、これらにつながる可能性がある。いずれにせよ調査区北側には井戸、甕ピット等の遺構が存在するところから、この南側部分に建物跡を想定するのが妥当かと思われる。

以上の他、この期の遺構にはＳＫ—15、ＳＫ—16などのような不整形土壙をはじめ多くの遺構



第4図　ＮＧ85－１次Ａ区　ＳＥ－01実測図

があり、また伴出する遺物の量も多く、当塔頭寺院の活動の盛時がこの期にあったものと考えられる。さらに各々の遺構の覆土には少なからずの焼土が伴っており、このことは天正の兵火によって一挙に廃絶されたことを如実に物語るものであるといえよう。

c　天正の兵火以前の遺構

溝（ＳＤ―16）　ＳＤ―15の北側で検出した石組みの溝で幅20センチメートルを測る。本来、西側へ延びるものであろうが検出しえたのは溝の末端部と思われるこの部分だけである。底は石敷きで西側から東側へ高低差60センチメートルとかなり急激な落ち込みを示す。覆土中から15世紀中頃の土師質皿が出土している。Ｂ区のＳＤ―01へ流入する溝であろう。

土壙（ＳＫ―35）　ＳＧ―01南側の不整形の土壙である。出土遺物の大半は瓦器椀と土師質の皿である。瓦器は体部外面までミガキ調整の施されるものが一部にあるが、内面だけのものが多く、概ね12世紀末13世紀初頭の間でおさまるものと考えている。

井戸（ＳＥ―02）　一辺約２メートルを測る隅丸方形の井戸である。地山をほぼ垂直に掘り抜き、深さは約 2.2メートルを測る。東南隅に径約10センチメートルの丸太杭が打ち込まれているところから、本来は素掘りの井戸ではなく木枠を伴っていたものと思われる。覆土は上層から、淡灰色弱粘質土、青灰色粘土、暗灰色粘土で、最下層は厚さ20センチメートル強の木端層である。このうち井戸の堆積土と考えられるのは青灰色粘土以下で、この部分に遺物が多く、とりわけ最下層の木端層からは下駄をはじめ多くの遺物が出土している。遺物の取り上げについては、青灰色粘土層と暗灰色粘土層を上層、木端層を下層としている。出土遺物の大半は瓦器椀と土師質の皿で、輸入陶磁は白磁の碗の破片２点を数えるだけである。なお、遺物の稿でも言及するが、上層と下層とでは若干の時期差が認められ、上層出土の遺物は12世紀末から13世紀初頭に、下層は12世紀後半代を考えている。生活に伴う具体的な遺構としては、これまでの数次にわたる調査の中でも最も古いものであり、当時の山内の生活を窺い知る良好な一括資料といえる。

以上、今次の調査の概要を記したが調査以前から想定されていたように、この地域が山内の中心地として古くから塔頭寺院の営みがなされていたことを裏付けるに足る資料を得たといえよう。しかし、これらの資料を詳細に検討するとき二つの空白期間を設定できるものと考える。一つは言うまでもなく天正の兵火直後（1585）から再興されるまでの約100年間であり、いま一つは13世紀後半を中心とする約100年間である。今次の調査ではこの時期の遺物を全く欠いており、この期間は何らかの理由で寺院の活動が停止していたものと考えざるをえない状況にある。またこれとは逆に、従来言われてきた興教大師覚鑁入寂から頼瑜の下山までの空白期間に当る12世紀後半代の井戸跡を検出したことは新知見であり、きわめて重要なことといえよう。

2　第１次Ｂ調査区の遺構

調査区は、Ａ区に東接する南北に分割された水田２枚である。水田南辺は江戸時代に積まれたと思われる石垣であり、水田面はこの石垣上端面より低くなっているため、当初から江戸時代の遺構の残存状態は良くないであろうと想定した通り、深く掘られた遺構だけが残存していた。天正の兵火にかかる時期の遺構は、20～30センチメートルの厚さに堆積した天正の兵火にともなう焼土層から比較的良好な状態で建物跡（ＳＢ―01）や溝（ＳＤ―05，07，08）が検出された。なお、この遺構面を構成する整地層の下からも建物跡（ＳＢ―02）や溝（ＳＤ―09，10）が検出された。

ａ　江戸時代の遺構

江戸時代の遺構は、水田の床下げにより、そのほとんどが削平を受けており、深く掘られた遺構だけが残存していた。遺構には井戸（ＳＥ―01）、溝（ＳＤ―02，03，04，06）、土壙（ＳＫ―01，03，04，11，12，14，15，16，17，18，19）、埋桶、埋甕等がある。

井戸は、和泉砂岩を石材とした径約0.8メートル、深さ約3.5メートルを測り、石積みの基底部には４個の大きな角割石を凵状に置き、その上に小振りの石をほぼ垂直に積んでいる。出土遺物中に丸釘を目釘穴に打ち込んだ鎌が出土しているところから、水田化される直前までの長期にわたり使用されていたのではないかと思われる。

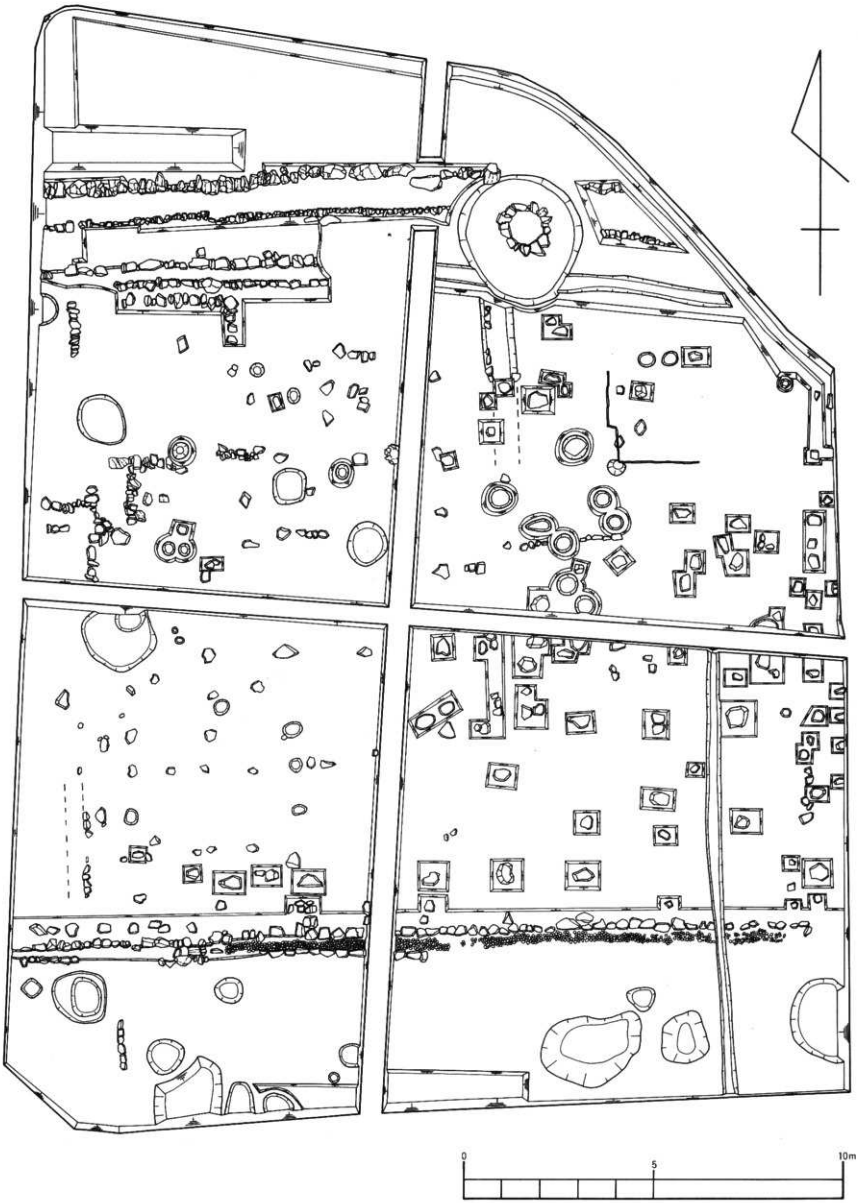
溝は４条を検出したが、いずれも素掘りのＵ字溝に石、瓦片、陶磁器片を乱雑に投げ込んだ暗渠排水溝であり、各溝の一部は水田化に際し削平を受けている。

土壙はいずれも石、瓦片、陶磁器片を投げ込んだものである。ただし、ＳＫ―03は板材が周囲から中心方向に倒れ込んだ状態で出土しているところから桶が埋められていたと考えられる。また、ＳＫ―11も覆土と掘り方からみて桶が埋められていたものと思われる。

埋桶は２基検出した。埋桶―01は径0.7メートル、側板の残存値は良好なもので50センチメートルである。側板には幅６～10センチメートルの板が29枚、底板には幅15センチメートル前後の板が４枚使用されていた。底板は相互が竹釘で止められていた。箍は２条認められた。埋桶―02は径0.9メートル、側板の残存置は良好なもので55センチメートルである。西半分が調査区外へ出るため定かではないが、幅10～20センチメートルの板25ぐらいを側板としているようである。底板には３枚の板が使用され、相互が竹釘で止められていた。

埋甕は、土師質の甕を単体で埋めたもので、性格については不明であるが、これまでの出土例からみて小便壺として使用されたものではないかと思われる。

塼列は、縦28センチメートル、横25センチメートル、厚さ３センチメートルの塼を、幅15～20センチメートル、深さ約25センチメートルの掘り方内に立てて並べたもので、２回の屈曲をみせる。延長約4.6メートルを検出したが、何を画していたかについては不明である。



第5図　NG85－1次B区　遺構平面図

b　天正の兵火にかかる時期の遺構

江戸時代の遺構検出面である灰褐色砂質土の直下層である20～30センチメートルの焼土層を除去した段階で検出される遺構である。遺構には溝（ＳＤ―05，07，08）、建物跡（ＳＢ―01）、土壙（ＳＫ―13）がある。

溝は計３条を検出した。ＳＤ―05は石組みの溝で、幅約30センチメートル、深さ約20センチメートルを測る。ＳＤ―07は幅約40センチメートル、深さ約20センチメートルの素掘りＵ字溝である。ＳＤ―05，07とも溝内には焼土が堆積していた。石組みと素掘りの違いはあるが、本来一条の溝となる可能性が強い。ＳＤ―08は石組みの溝で、ＳＢ―01の雨落ち溝である。幅約30センチメートル、深さ約20センチメートルを測り、溝底には玉石が敷かれている。ＳＤ―05，07同様、溝内には焼土が堆積していた。

ＳＢ―01は南面する建物跡である。礎石の残存状態は東南の¼は良好であるが、他の部分の残りは良くない。建物は現存する礎石から10間半×６間の規模に復原することができ、本柱を受ける礎石以外に床、縁を受けると思われる小振りの礎石もみられ、ことに建物の前面と東側には落し縁が設けられていたと考えられる。柱間は１間が2.1メートル（７尺）で、柱は角柱であることが知られ、書院造り風の建物であったろうと想定される。本建物跡は敷地一杯に建てられており、他に施設を伴わないところから、これまでの調査で検出した建物跡とはその性格を異にすると思われる。

c　天正の兵火以前の遺構

天正の兵火にかかる時期の遺構面を構成する整地土（暗黄褐色粘質土）下で検出される遺構で、溝（ＳＤ―01，09，10）、建物跡（ＳＢ―02）、土器溜等の遺構がある。

溝は計３条を検出した。ＳＤ―01は幅50～80センチメートル、深さ70～90センチメートルを測る。南壁は人頭大の比較的丸味をおびた石を整然と積んでいるのに対し、北壁は大小の石を雑然と積むというように石材の規模や積み方に相違があり、石積みに時期差があるように思われる。溝中からは15世紀中頃の遺物が出土し、この時期の敷地を画する溝と考えられる。天正の兵火にかかる時期の遺物の出土が皆無であるところから、この時期には廃絶し埋められていたものと思われる。ＳＤ―09，10はＳＢ―02に伴う雨落ち溝と考えられるが、前面の溝（ＳＤ―09）の方が幅も広く、深い。本来は石組みの溝であったと思われる。

ＳＢ―02は東面する建物跡で、礎石から６間半×４間の規模に復原することができ、ＳＢ―01同様、本柱を受ける礎石以外に床、縁を受ける礎石もみられ、前面と背面には落し縁が設けられていたと考えられる。柱間は７尺であり、ＳＢ―01に先行する同種の建物と想定できる。

土器溜はＳＢ―02に先行する遺構で、やや凹んだ地形のところに炭層に遺物が混った状態で出土しているところから、修法に関連する遺構の可能性を考える必要があるかも知れない。

Ⅲ 遺 物

1　第１次Ａ調査区出土の遺物

a　第１層出土の遺物（図１～１～７、図版９）

（１～３）は土師質皿である。このうち（１）はよく水簸された胎土を用いた白土器。（２・３）は赤橙色を呈する。（４）は口径６cmの小振りの皿で、内面に白濁色の透明釉がかかる。（５）は口径13.6cm、器高5.4cmを測る瓦器椀で体部下半にやや強い指頭痕が残る。（６）は草緑色を呈する中国製の青磁碗で、見込みに印花文を配する。畳付及び外底は露胎である。（７）は形態的には白磁の菊皿であるが、外面のみやや暗い青色を呈す。瑠璃釉もしくはその一種と考えている。（1001）は鹿角製の賽である。（1002）は鉄砲の玉である。

b　第２層出土の遺物（図１－８～14、図版９）

（８～11）は土師質皿でいずれも赤橙色を呈する。このうち（９・10）は口縁部が強いヨコナデ調整のため肥厚するもので、当遺跡では天正の兵火にかかる時期のものとして最も普遍的なタイプである。（12）は口縁が「Ｔ」字状の小型甕である。底部は回転糸切り露胎である。（13）は中国製青磁碗で見込みにスタンプによる菊花文を配する。（14）は白磁の小皿。この種のものは軟・硬両質が知られているが、本品は硬質に該当するものである。（1003）は鎧に使われる金銅製の留金具である。

c　第３層出土の遺物（図１－15～26、図版10・11）

（15～17）は土師質皿で、いずれも赤橙色を呈する。（15）は口縁部の肥厚するタイプのものであるが、口径14cmとやや大振りである。（18）は瓦質の火舎。体部三ヵ所に凸帯が巡り、外面は丁寧なヘラ磨きによって平滑化されている。（19～21）は中国製の青磁碗で（19）は暗緑色を呈し口縁部が外反する無文の碗、（20）は丸ノミによる粗略な蓮弁文碗、（21）はヘラ先による細線の蓮弁文碗である。（22）は青磁の盤もしくは大振りの碗となるものである。（23・24）はともに白磁の皿である。（25）は滑石製の鍋、（26）は石製の小型硯である。

d　第４層出土の遺物（図２－27～33、図版11）

（27～33）はいずれも土師質皿である。このうち（27～29）は中皿、（30～33）は小皿で、うち（32・33）はヘソ皿である。

e　遺構出土の遺物

ＳＥ－01（図２－34～37、図版11・12）

土師質皿（34～42）のうち（36）は白色を呈し、口縁部は僅かに外反する。その他のものは赤橙色ないし淡黄色を呈し、口縁部の肥厚するもので中皿（34・35）と小皿（37～42）に大別できる。（43）は白磁の菊皿。内底面には蛇ノ目状に釉ハギが施されている。（44・45）はともに白

磁の小杯で（45）の外底には呉須による「大明年造」銘が記されている。（46」も同様の小杯で、体部外面は茶褐色を呈する。（47）は染付の皿である。（1004）は火箸である。

ＳＥ—02上層（図２・３・４—48～98、図版４～８）

土師質皿は大皿（48～51）と小皿（52～75）に大別できる。このうち大皿は口径16cm弱、器高3.5cm前後を測る。体部上半から口縁部にかけてヨコナデ調整を施し、下半及び底部は粗雑な指押えが目立つ。小皿はいずれも口径9.0cm前後、器高1.5cm前後を測るものであるが、口縁部の形態により３種類に大別できる。最も出土例が多いものは口縁部のヨコナデが強く、このためわずかに外反し、底部と体部の境が明瞭となるもの（52～60）である。そのほかヨコナデはさほど強くなく、体部から口縁部にかけて斜め上方に立ち上るもの（61～69）、さらに底部からやや丸味をおびて立ち上り端部を丸く処理するもの（70～75）がある。

（76・77）は土師質の羽釜である。「く」の字状に外反した口縁の端部は内側につまみ上げ丸くおさめる。鍔の長さは1.5cm。全体に暗茶褐色を呈し胎土に細砂粒を多く含む。

瓦器椀（78～96）は口唇部内面の沈線の有無、外面のミガキの有無、見込みのミガキの形状によって数種類に分類でき、さらに全体のプロポーション、高台の形態などを加味すれば極めてバラエティに富むものであり、口径15cm前後、器高５cm前後という法量の斉一性を除けば全体の統一規格を抽出するのは困難といえる。このことが遺棄された年体幅によるものか否かは現段階では速断できないが、前述したように井戸からの一括性の高い資料と考えており、若干の時期差を考慮しても使用された当時、すでにこのようなバラエティをもって存在していたものと考えたい。このことは当遺跡における瓦器椀の供給が一元化されていたものではなく、各地からの流入（技術も含めて）が想定され、当時の商品流通の広範さの一端を窺わせるものといえる。なお、個々の特徴についてみれば沈線を有するものは６個体（78・82・84～86・91）であるが、いずれも大和型にみられるような鋭利な沈線ではなく鈍く雑な感じである。外面にミガキを有するもの（90～92・96）は、ミガキが口縁部もしくは体部上半までにとどまる。また、見込みのミガキは連結輪状のループをなすもの（89・90）と平行線状のループをなすもの（82～88）、連続平行線をなすもの（78～81）がある。（91）は瓦器小皿である。（98）は白磁の碗で断面三角形の高い高台を有する。高台及び外底は露胎である。

ＳＥ—02下層（図５・６・７—99～143、図版16～21）

土師質皿（99～113）はいずれも口径９cm前後の小皿で、上層で述べたように強いヨコナデの見られるもの（99～103）、丸く立ち上がるもの（104～113）がある。（114）も土師質小皿の小片であるが、内面に墨書による人面が描かれている。（115）は土師質土釜である。

瓦器椀（116～138）は大部分が外面にミガキ調整が施され、見込みのミガキ調整も平行線のもの（116）、平格子のもの（218・219）がみられ、その他のものも連結輪状のループであるなど全

体に上層より一時期古い様相を呈する。(139) は瓦器小椀。(140～142) は瓦器の小皿で、見込みに (140～141) はジグザグ状の平行線、(142) は輪状の平行線が施されている。(143) は瓦器の片口鉢である。口径22.5cm、器高10.5cm、器壁は体部中央で0.8cmを測るやや厚手のものである。体部内面は椀同様連続圏線、見込みにはジグザグ状の平行線を施す。

木製品には箸 (1005)、下駄 (1006～1010)、滑石 (1011) がある。下駄には差歯下駄 (1007・1008) と連歯下駄 (1006・1009・1010) の二種がある。滑車は当初釣瓶用のものと考えたが、歯車のつくことから別の用途を考える必要があろう。

ＳＦ—01 (図７—144～146、図版21)

(144) は土師質の焙烙。(145) は唐津の碗で、暗褐色の釉が体部下半までかかる。(146) は唐津の大皿である。刷毛目を施したのち緑色と褐色の釉で簡略化された図案を描く。内底面に６ヵ所の目跡が残る。

ＳＫ—03 (図８—147～150、図版21・22)

(147) は白磁の杯。(148・149) はともに伊万里の染付碗である。(150) は中国製の染付皿で、口縁部内面に四方襷文帯が巡る。

ＳＫ—07 (図８—151～154、図版22)

(151) は白土器の土師質皿。口縁部から体部上半に２回のヨコナデを施す。(152・153) は赤橙色を呈し肥厚するタイプの皿である。(154) は青磁碗の半焼成品である。草緑色の釉調を呈し、施釉後見込み部の釉を輪状にハギ取っている。

ＳＫ—10 (図８—155～157、図版22)

(155～157) はいずれも土師質皿で、このうち (156) は内面に粗い刷毛目が残る。

ＳＫ—12 (図８—158～160、図版22)

(158～160) はいずれも白土器の土師質皿である。中皿 (158・159) は口縁部に２回のヨコナデ、小皿 (160) は１回の強いヨコナデを施している。

ＳＫ—15 (図８—161～169、図版22・23)

(161～164) は赤橙色ないしは黄白色を呈する土師質皿で、体部から口縁部にかけて丸味をおびて立ち上るものである。(165～169) は小皿で口縁部に１回のヨコナデを施す。

ＳＫ—16 (図８—170～172、図版23)

(170・171) は白色の土師質皿。(172) は青磁碗で口端部は僅かに外反し、丸くおさめられる。草緑色を呈し、内外面とも片切彫りによる粗略な文様が描かれる。

ＳＫ—27 (図９—173～175、図版23)

(173) は備前のスリ鉢。赤茶色を呈し、単位11本のスリ目が引かれている。(174) は京焼の筒茶碗。(175) は伊万里の染付碗である。

ＳＫ—28（図９—176～178、図版23）

（176）は赤橙色を呈する土師質の皿。（177）は白土器の小皿である。（178）は白磁の皿で全体に粗い貫入、また小孔が目立つものである。

ＳＫ—35（図９・10—179～194、図版24・25）

瓦器椀（179～186）は前述のＳＥ—02上層とほぼ同時期のものと考えられ、僅かに外面にミガキの残るもの（180～182）と、内面のみに連続圏線状のミガキを施すものがある。見込みは（181）がジグザグ状の連続平行線、他は雑な連結輪状のループとなっている。

土師質皿のうち（187）は口縁のヨコナデが強く器高の高い大皿。小皿ではヨコナデが強く底部と体部が明瞭な境をなすもの（188～190）と器高の低い扁平なもの（191～193）がある。

ＳＤ—08（図10—195・196、図版25）

（195）は土師質の大皿で赤橙色を呈し、口縁部に２回のヨコナデを施す。（196）は白磁の碗。灰白色を呈し、体部下半以下は露胎となる。高台は鋭い削り出しにより端整な台形状を呈する。体部下半の露胎部には回転削り痕が残る。

ＳＤ—12（図10—197～200、図版25）

（199～200）はいずれも赤橙色ないしは黄色を呈する土師質の中皿で、口縁部が肥厚するタイプのものである。

ＳＤ—15（図10—201～203、図版26）

（201）は土師質の皿。（202）は東播系のこね鉢。（203）は備前焼のスリ鉢で端部は上下に拡張しており、備前焼Ⅵ期に該当するものであろう。体部下半に重ね焼成痕が認められる。

ＳＧ—01（図10—204～208、図版26・27）

（204・205）は伊万里の染付碗で（205）はくらわんか手の茶碗である。（206）は同じく伊万里の染付小壺である。（207）は土瓶の蓋、（208）は土瓶で底部は極端な上げ底となっている。同一個体ではないが、共に草緑色の釉調を呈する。

埋桶—01（図11—209～211、図版27）

（209）は京焼風の唐津焼碗である。艶のある飴釉がかかり暗い枇杷色を呈する。総釉で畳付部のみ釉を削り取っている。全体に細かい貫入が入る。軒丸瓦（210）は内区に左巻き三ツ巴文を、外区には13個の珠文を配する。軒平瓦（211）は中心に花冠文を、その左右に唐草文を配したもので、周縁の左右の幅は広い。

埋甕—03（図11—212・213、図版27）

（213）は丹波産と推定される水屋甕である。水平に肥厚した口縁端部に２本の凹線が巡る。体部上半には粗い凹線を施す。（212）は透明釉を施釉した灯明皿である。底部は回転糸切りで、口縁部以下の外面は露胎となっている。

2　第１次Ｂ調査区の遺物

a　表土・床土出土の遺物（図12～214～227、図版28・29）

（214～216）は土師質中皿である。口縁は内弯気味にゆるく立ち上がる。（217～219）は土師質小皿で、このうち（217）は口縁部の肥厚する根来寺通有のタイプである。（220）は透明釉をかけた土師質中皿で、底部外面には糸切り痕が残る。灯明皿として使用されたらしく、口唇部にタールの付着がみられる。（221）は伊万里染付碗で体部外面と内面見込みに文字文が描かれる。（222）は腰折れの皿で、内面見込みに山水文が描かれる。（223）は伊万里染付青磁蓋で、口縁部内面には細かい四方欅が、内面見込みには２条の圏線内に筆描きによる五弁花が描かれている。（224）は美濃瀬戸系の灰釉小碗で、体部下半は露胎である。（225）は青磁碗で、総釉の後高台内を蛇ノ目状に釉を拭き取っている。（226）は白磁の小皿で、高台は割高台である。（227）は染付皿である。内面見込みには「壽」が２条の圏線内に書かれている。高台畳付部分には砂が付着する。

b　第１層出土の遺物（図12―228～224、図版29・30）

土師質皿には中皿（228・229）と小皿（230～240）がある。中皿のうち（228）は白土器である。小皿には口縁部が肥厚するタイプのもの（230～237）と、口縁部が内弯気味で丸くおさめられたもの（238～240）との２種がある。（241）は火中した青磁小碗で、総釉ののち床台畳付部の釉は削り取られている。また、高台内も蛇ノ目状に釉が掻き取られている。（242）は口縁が内弯する白磁小皿である。（243）は口縁が端反りする白磁皿である。（244）は白磁坂で、口縁が端反りするタイプである。

c　第２層出土の遺物（図13・14・15―245～297、図版30～35）

土師質皿は白土器（245～250、269～272）と赤土器（251～268）に大別される。白土器はさらに大皿（245）、中皿（246～250）、小皿（269～272）、赤土器もまた中皿（251・252）、小皿（253～268）に分けることができる。大皿は径18cm、中皿は径11cm前後、小皿には８cm前後と９cm前後の２種があり、口径のやや大きい９cm前後の小皿は、口縁が肥厚するタイプの小皿である。口径の小さい小皿は、口縁のヨコナデが比較的弱いタイプである。白土器の小皿には通常の小皿とヘソ皿に分かれる。（246）は内面に刷毛目が施され、こののち口縁のヨコナデが行われている。土師質土釜（273）は、鍔の位置が高く頸部は短い。口縁端部を内側に折り曲げ、上面にわずかな凹みをもつ。土鍋（274）は「く」字状に外反した口縁端部をわずかに上方につまみあげている。胎土中には砂粒が多量に含まれる。（275）は瓦質のこね鉢である。内面を刷毛で調整したのち、口縁部を横ナデし、外面口縁付近は横方向、体部に縦方向のヘラ削りを行っている。（276）はシャープな肩の張りを見せる美濃瀬戸系の天目茶碗である。体部下半の露胎部には化粧がけは行われていない。胎土は灰白色を呈する。（277）は美濃瀬戸系の灰釉おろし皿で、底部は糸切りであ

る。(278) は常滑焼甕である。大きく「く」字状に外反する口縁の端部を上方につまみ上げている。(279) は備前焼すり鉢である。斜めに切った平坦な口縁端部は、内外にわずかに拡張する。(280) は草緑色の釉調をみせる青磁碗で、片切彫りの蓮弁文が施される。釉は高台内部に及ぶ。内面見込みに印花文がみられる。(281) は端反り口縁の青磁碗で、オリーブ色の釉調をみせる。(282) は青磁蓮弁文皿で、総釉ののち畳付部の釉を削り取っている。(283) は口縁部を除く内面は露胎で、櫛目が施されている。外面も体部上半にだけ施釉されている。すり鉢として使用されたらしく、櫛目はすりへっている。(284～286) は白磁皿である。口縁部が端反りするタイプ (284～286) と内弯気味で丸くおさめられたもの (287) と2種ある。(288・289) は白磁坏である。(289) は内面見込みが蛇ノ目状に釉が掻き取られている。(290) は染付碗で、体部外面と内面見込みに草花文が描かれている。高台畳付け部は釉が削り取られている。(291・292) は口縁部が外反する口銹の染付皿で、内面見込みに草花文が描かれている。高台は貼り付け高台である。(293) は一部を欠くが、外底部に「長命富貴」の吉祥句が筆描きされた染付の皿で、体部外面には円で囲んだなかに草花文が描かれている。(294・295) はセットになる染付合子の蓋と身である。(296・297) は天目茶碗でザックリした灰色の胎土で、(297) には露胎部に化粧がけが施されている。

d　第3層出土の遺物　(図16・17・18・19—298～384、図版35～39)

土師質皿は、白土器 (298～305・317～330) と赤土器 (306～316・331～309) に大別される。白土器はさらに大皿 (298)、中皿 (299～305)、小皿 (317～330)、赤土器もまた中皿(306～316)、小皿 (331～309) に分けることができる。大皿は径17cmで第2層出土のもの (245) より一廻り小さいが、器高は逆に高い。口縁部のヨコナデが強く、体部との間に段を作る。中皿は径11cm前後と第2層出土のものと大差ないが、概して本層出土のものは口縁部のヨコナデが弱い。小皿は径8cm前後で、口縁部のヨコナデが強いもの (317～326・331～352)、口縁部のヨコナデが弱く、口縁部が内弯気味のもの (327・328・353～369) とヘソ皿 (329・330) がある。(370) は内外面とも丁寧にヨコナデされ皿部に「ハ」字状に開く厚い高台を貼り付けた皿である。(371) は「く」字状に外反した口縁部の端部を上方につまみ上げ丸くおさめた土師質土鍋である。(372～376) は瓦器椀である。口縁部のヨコナデは顕著でなく、高台は認められない。また、内面には暗文を認められない。。瓦器小皿 (377) も口縁部がヨコナデが弱い。いずれも終末期の瓦器と考えられる。(378) は瓦質甕である。口縁部は外反しその端部はやや垂下する。体部外面は細い叩きで仕上げられている。内面はナデ仕上げである。(379) は瓦質こね鉢である。口縁部にはヨコナデによる調整が施され、体部外面口縁部近くは横方向への削り、体部は縦方向への削りを施し、内面はナデ調整ののち単位21本の櫛によるすり目が施されている。(380) は内面見込みに目の粗いおろし目をヘラ先で刻んだ美濃瀬戸系の灰釉おろし皿である。底部には糸切痕が残る。(381) は

備前焼すり鉢である。斜めに切った平坦な口縁端部は、内外にわずかに拡張する。(383) は灰色の緻密な胎土をもち、内弯気味の口縁をもつ中国製の天目茶碗である。(384) は均整唐草文を配した軒平瓦である。

e　遺構出土の遺物

ＳＤ―01上層　(図19　20―385～403、図版39～41)

(385・386) は口縁部が大きく外反した土師質大皿で、口縁部は上方につまみ上げ丸くおさめている。(387～394) は土師質中皿で、(387) は口縁部に強いヨコナデを施した底部が平坦になる白土器である。(388～391) は口縁部に強いヨコナデを施した中皿であるが、外反気味のもの (388) と、斜め上方にゆるやかに立ち上がるもの (389～391) とがある。(392～394) は、口縁部のヨコナデが比較的弱い。(393・394) は灯明皿として用いられたらしく、タールの付着が認められる。土師質小皿には、径が９cm前後のもの (395・396) と８cm前後のもの (397～400) との２種がある。前者のには口縁部が外反するもの (395) と口縁端部が上方につまみ上げられるもの (396) とがある。後者には白土器 (397～399) と赤土器 (400) とがあり、白土器はいずれも口縁部のヨコナデは強い。赤土器は口縁部のナデは弱く斜め上方に立ち上がる。土師質土釜 (401) は、鍔の位置が　く、口縁端部は内傾する。体部外面に煤の付着が認められる。(402) は中国製青磁で、釉は高台内側までかかる。(504) は東播系のこね鉢で、外面口縁部近くはヨコナデされているが、体部は未調整である。

ＳＤ―01下層　(図20―404～419) 、図版41―1012、42)

(404～406) は土師質中皿である。(404) は口縁部に強いヨコナデが施され、体部との間に段を有する。(405) はやや外方に引き出される口縁を持つ。(406) は内弯気味の口縁で端部は丸くおさめられている。土師器小皿 (407～414) はいずれも口縁に強いヨコナデが施されているが、端部が内弯気味に丸くおさめられているもの (407～410) と外方へ立ち上がるもの (411～413)、あるいは上方へ立ち上がるもの (414) がある。(415) は口縁が「く」字状に外反し、端部が上につまみ上げられた土師質鍋である。(416) は土師質土釜である。鍔の位置は高く、口縁端部はやや内弯しながら上方につまみ上げられている。体部に煤の付着がみられる。(417・418) は瓦質のこね鉢である。(417) は内面に刷毛調整されたのちに櫛によるスリ目が施されている。外面は口縁近くは横方向へのヘラ削り、体部は縦方向へのヘラ削りがみられる。(418) は非常に丁寧な作りで、内面はヨコナデ調整のあとスリ目が施されている。外面は横方向へヘラ削りが行われている。(419) は備前焼の小壺で、頸部、肩部に単位３本の櫛による直線文が施されている。

ＳＤ―08 (図20―420、図版42)

(420) は中国製青磁三足香炉で、青白色の釉には粗い貫入が入る。足は割り高台の手法で削り出されている。

ＳＫ－01（図20，21－421～425、図版42，43）

（421～423）は伊万里染付碗である。（421）は体部外面に草花文が描かれたくらわんか茶碗である。（422）は腰折れの碗である。体部下半には垣根状の文様帯がめぐり、上半には竹と梅の文様が描かれている。口縁部内面には四方襷文が、見込みには五弁花が筆がきされている。（423）は体部外面に図案化した菊花文が描かれる。口縁部内面には四方襷文が、見込みには五弁花が筆がきされている。（424）は口縁が「く」字状に外反する行平で、口縁端部には把手が貼り付けられている。（425）は京焼の箱を模した水滴で、上面には翁の面と供物を載せた高坏、房付きの紐などの装飾が貼り付けられている。翁の面については型押しである。

ＳＫ－03（図21－426、図版43）

（426）は小振りの伊万里染付碗で、体部外面に草花文が描かれている。

ＳＫ－04（図21－427、図版43）

（427）は伊万里染付碗で、体部外面に菊花文と草花文が描かれている。高台畳み付部に砂の付着がみられる。

ＳＫ－11（図21－428～430、図版43）

（428）は伊万里染付碗である。（429）は伊万里染付皿で内外面に草花文が描かれている。（430）は皿部と床台部を別々に作り、釉着させた伊万里染付皿である。高台部と皿部を別作りし釉着させている関係で皿の高台は中心部にのっていない。高台内部には砂が多量に付着する。

ＳＫ－13（図21－431・432、図版44）

（431）は緑がかった褐色を呈する釉をかけた唐津焼天目茶碗で口縁部はシャープな作りになっている。（432）は強いヨコナデのため口縁が肥厚する土師質中皿である。

ＳＫ－15（図21－343・434、図版44）

（433）は体部内面に網手文が描かれた皿で、見込みには蛇ノ目釉ハギがみられる。（535）は蓋のつく伊万里染付鉢である。

土器溜（図22，23，435～513、図版44～48）

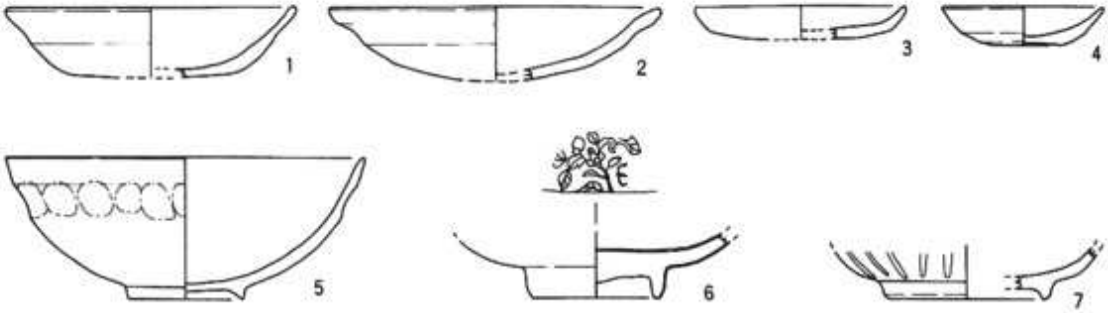
土師質皿は白土器（435～437、513）と赤土器（438～512）に大別でき、白土器はさらに中皿（438～512）とヘソ皿（512）に分けることができる。赤土器と同様に中皿（438～466）と小皿（467～512）に分けることができる。中皿はいずれも径11cm内外、器高 2.5cm内外を測る。小皿は径８cm内外器床 1.5cm内外を測る。

ＳＥ－01（図版48－1013～1019）

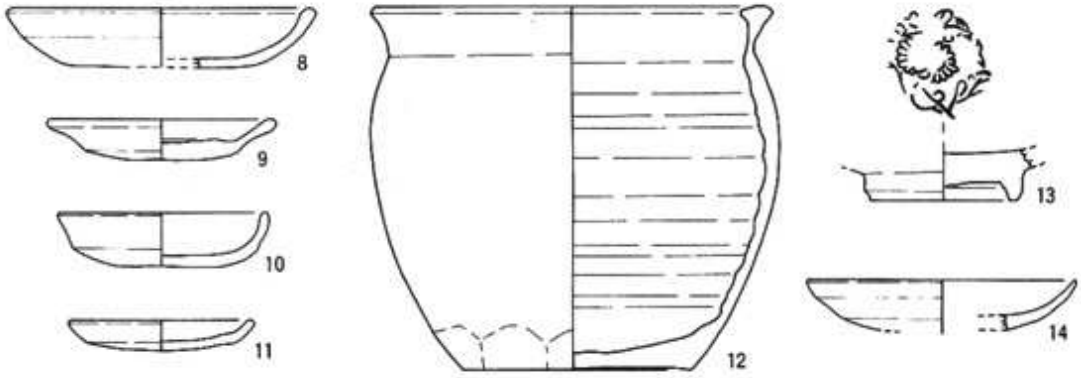
（1013）は鍍金した煙管の吸口である。（1014～1016）は鍍金した飾り金具である。（1017～1018）は釘である。（1019）は薄鎌で柄は丸釘で止めてある。

図1

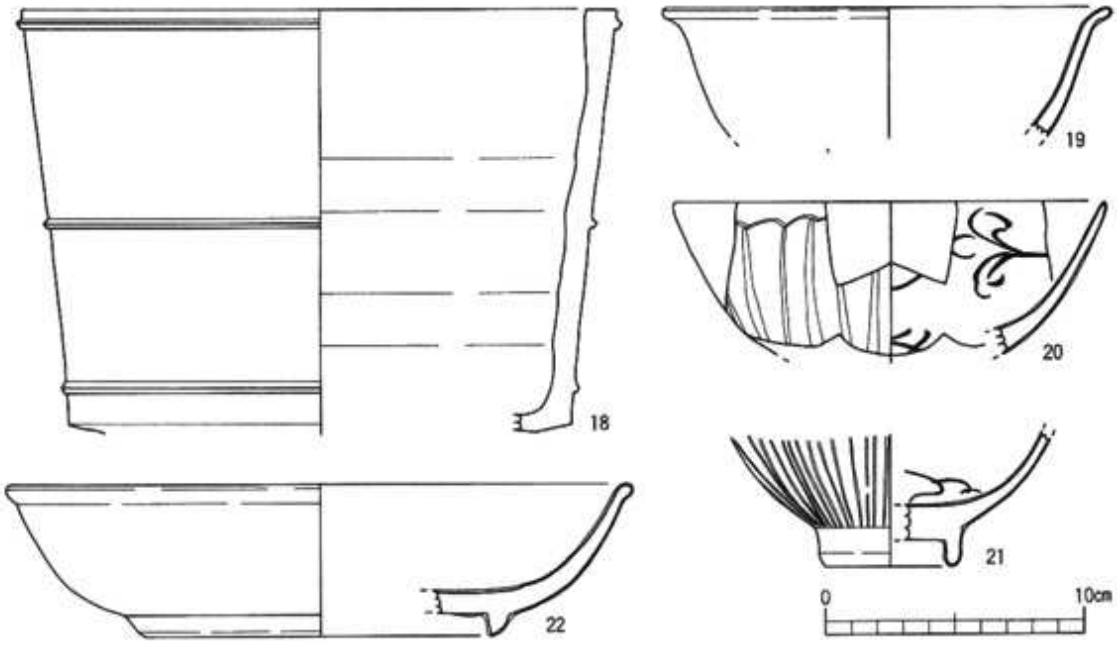
1次A区　第1層（1～7）

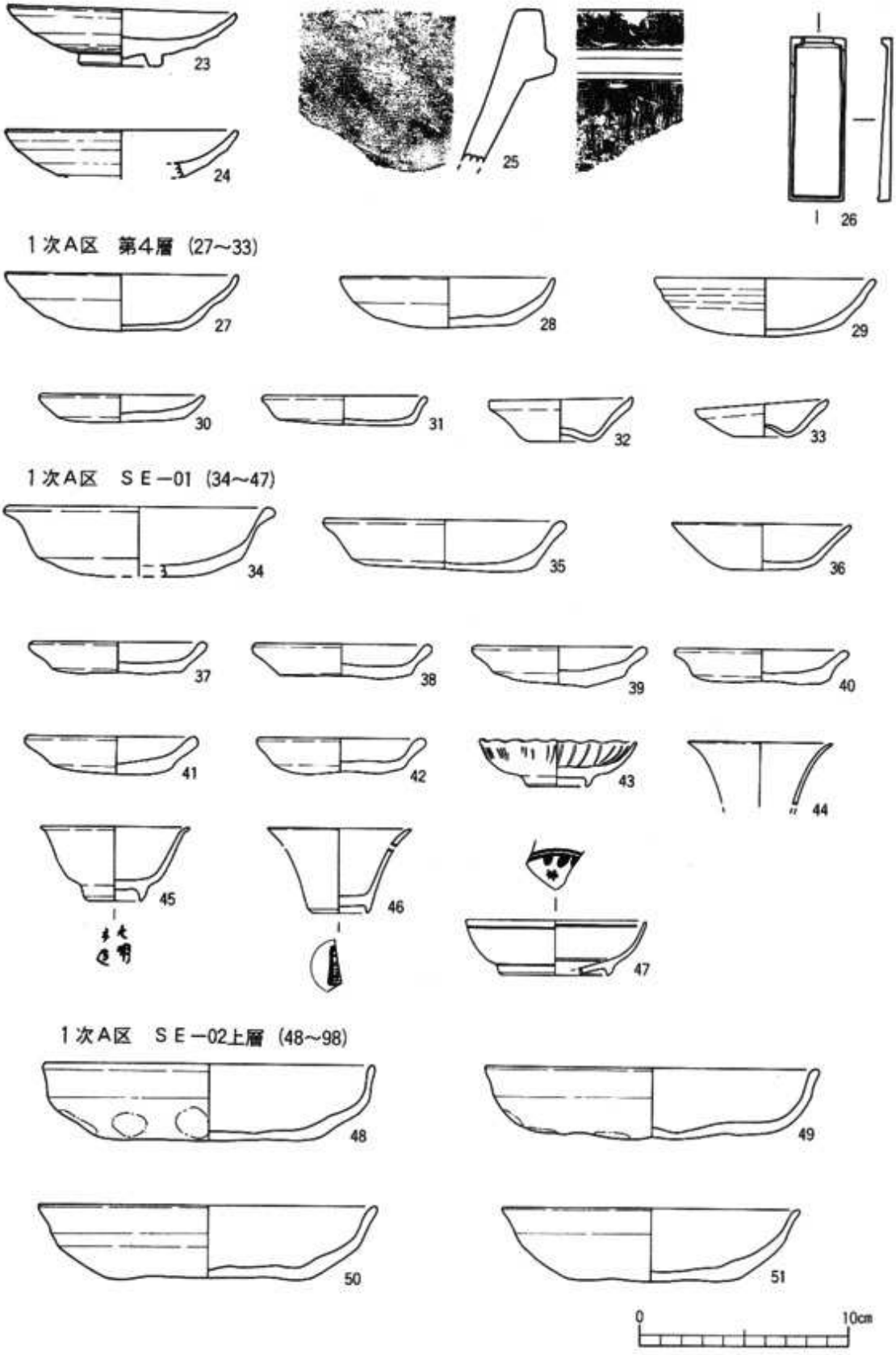


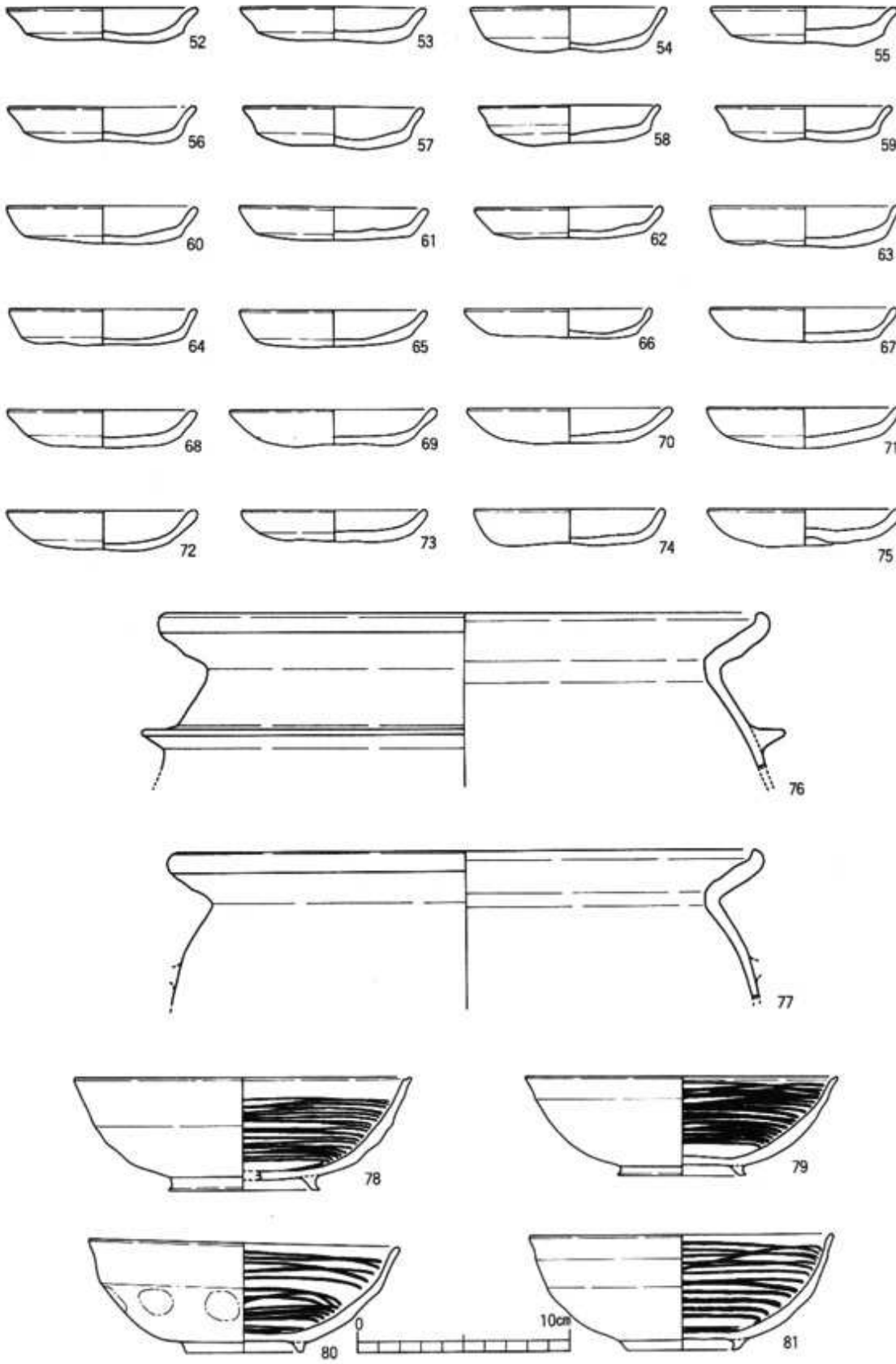
1次A区　第2層（8～14）

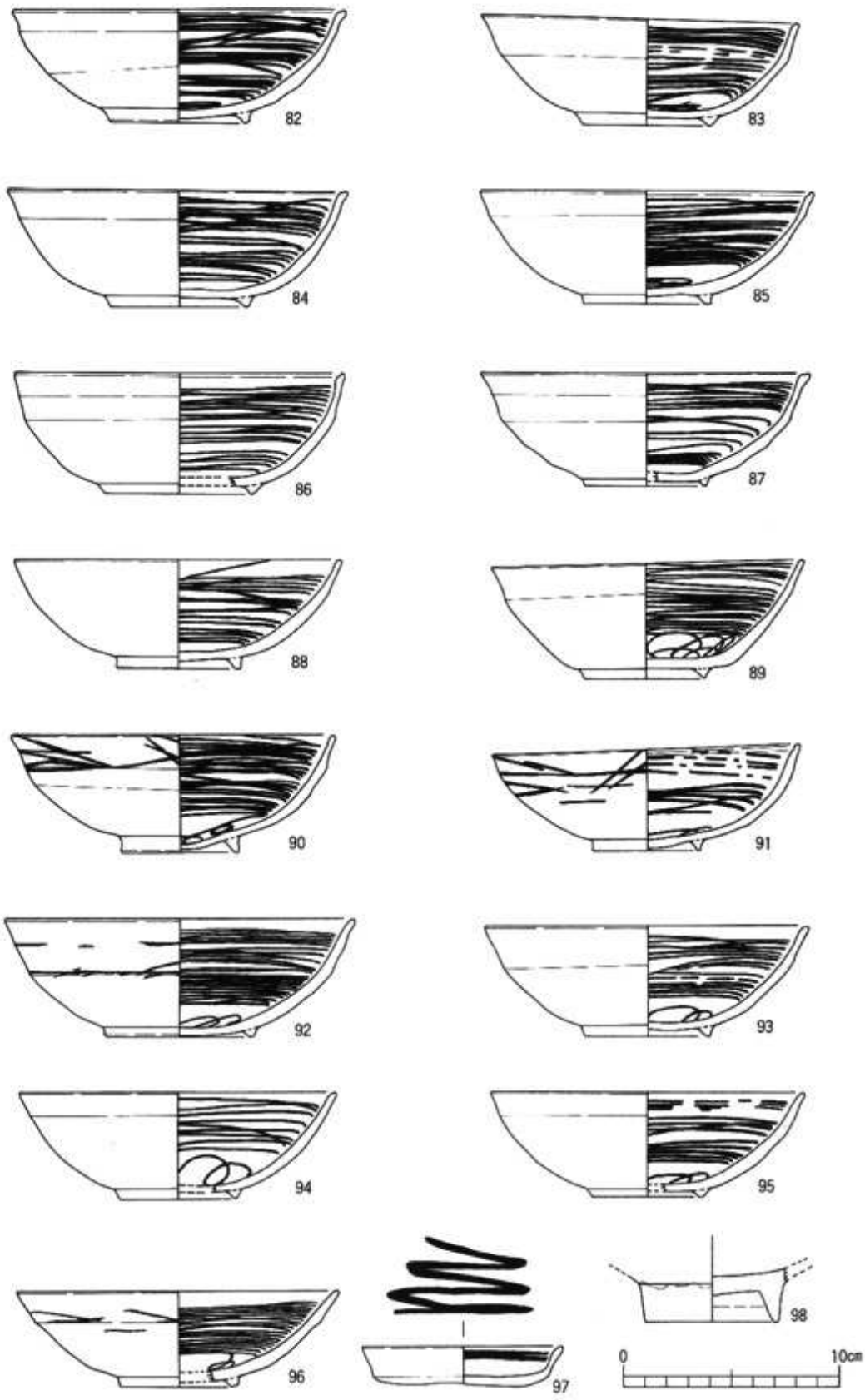


1次A区　第3層（15～26）

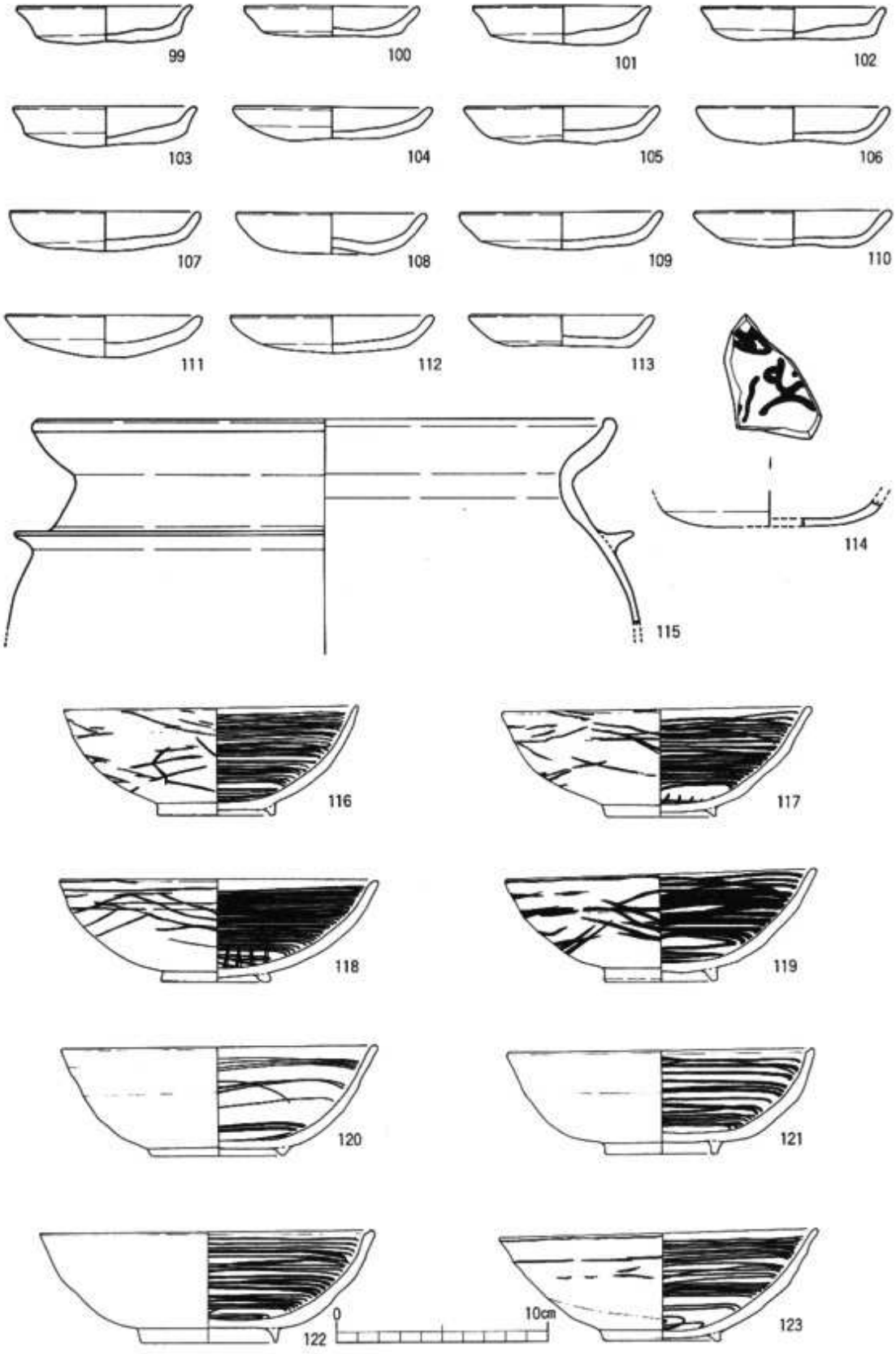


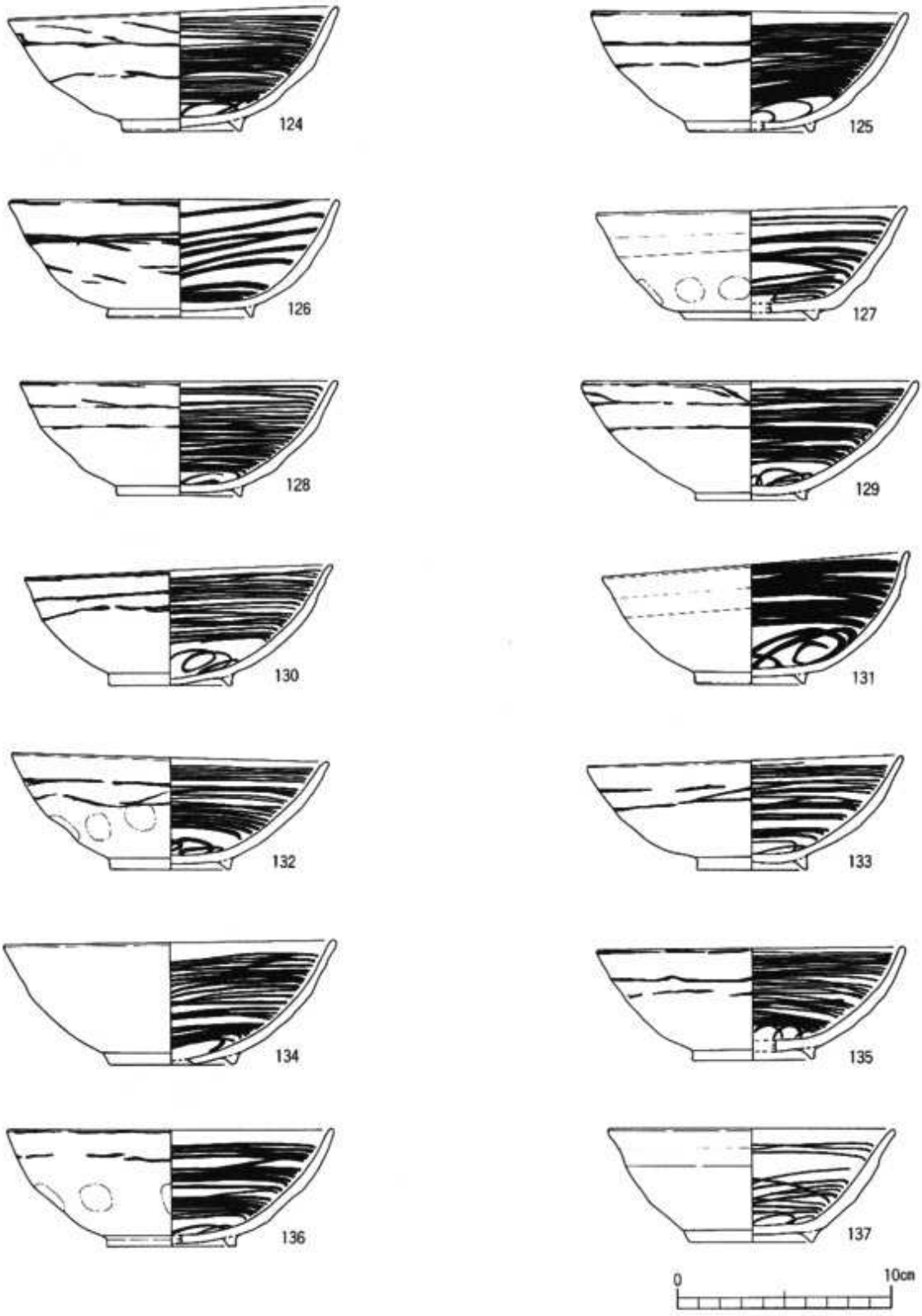

23
24
25
26
1次A区　第4層（27～33）
27
28
29
30
31
32
33
1次A区　SE－01（34～47）
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
1次A区　SE－02上層（48～98）
48
49
50
51
0
10cm

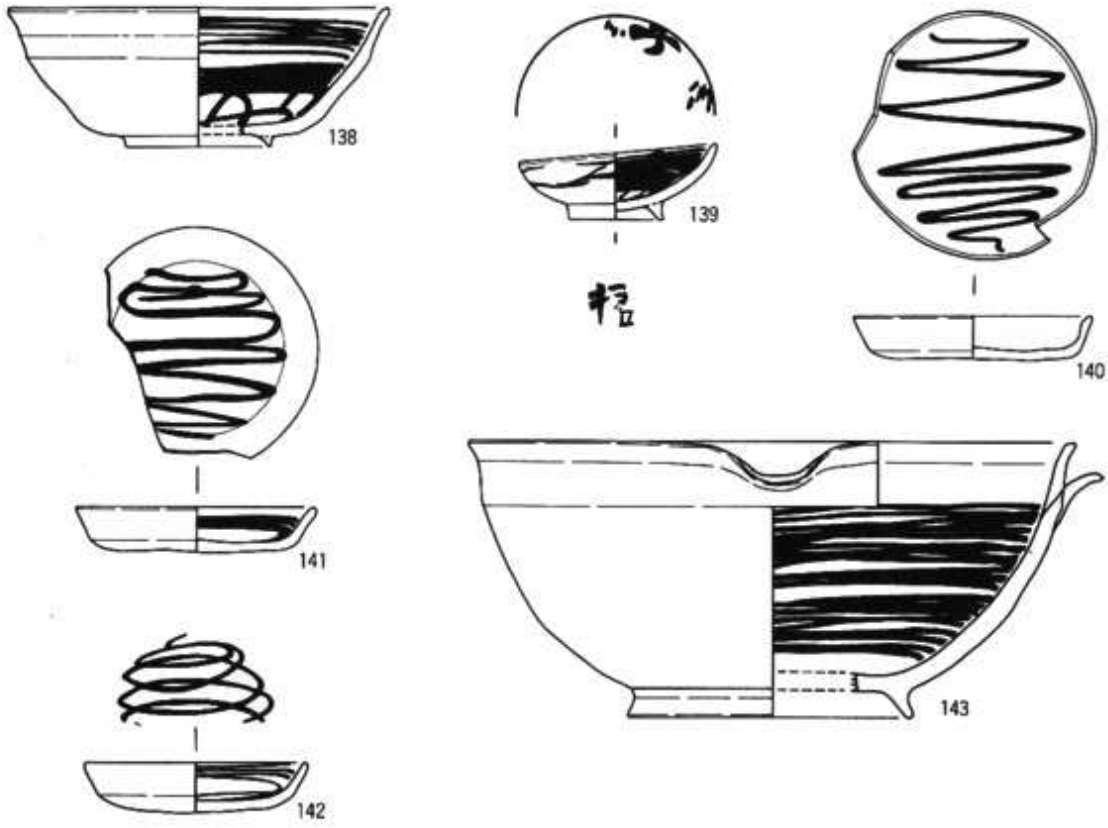

52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
0
10cm


82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
0
10cm

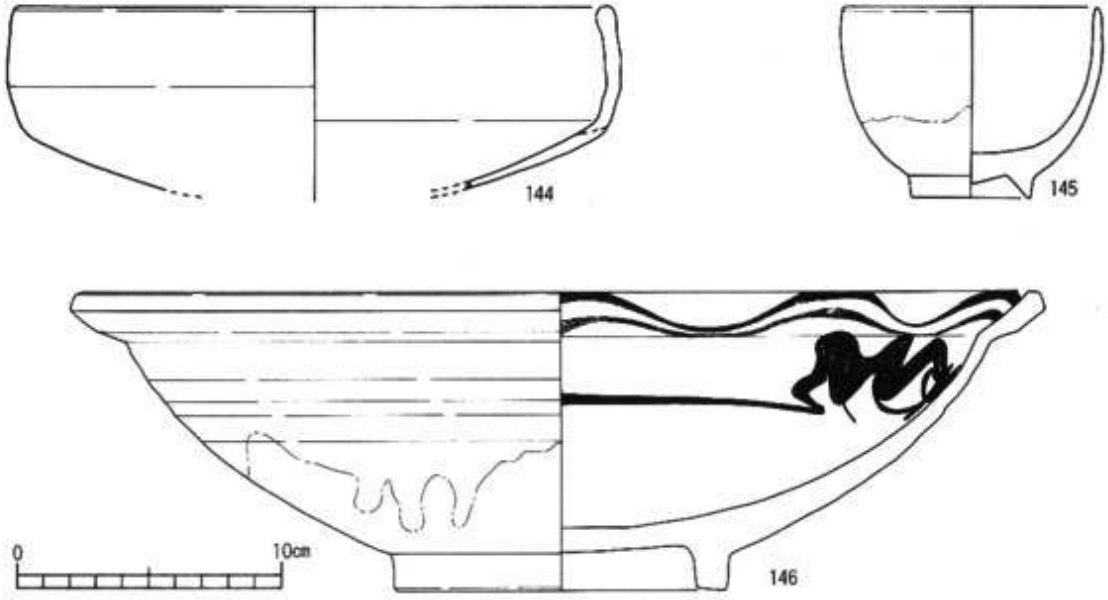
1次A区　SE−02下層（99〜143）




124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
0
10cm

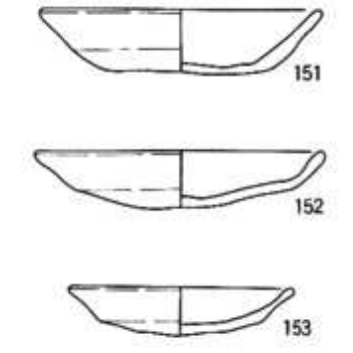


1次A区　SF－01（144～146）

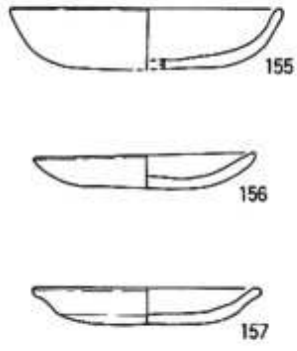


1次A区　SK−03（147〜150）

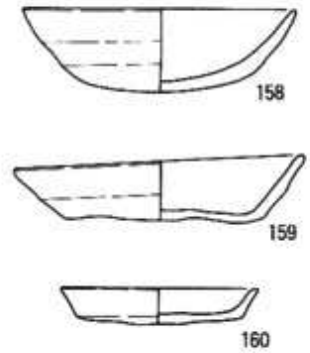
1次A区　SK−07（151〜154）



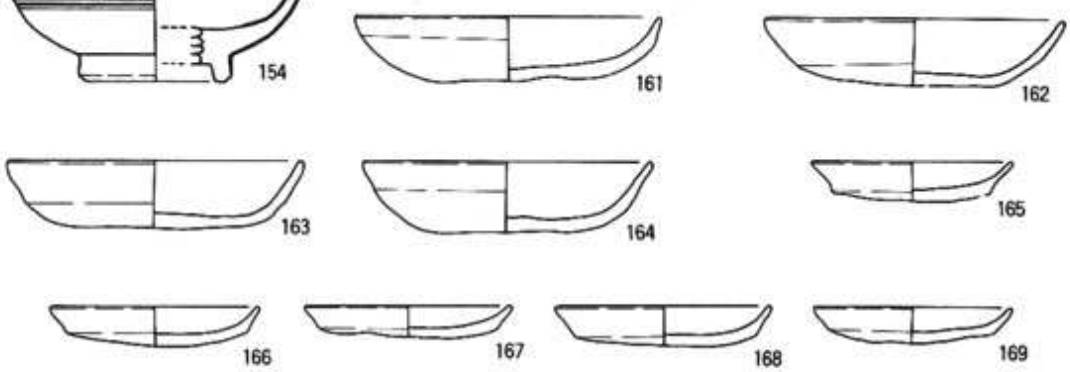
1次A区　SK−10（155〜157）



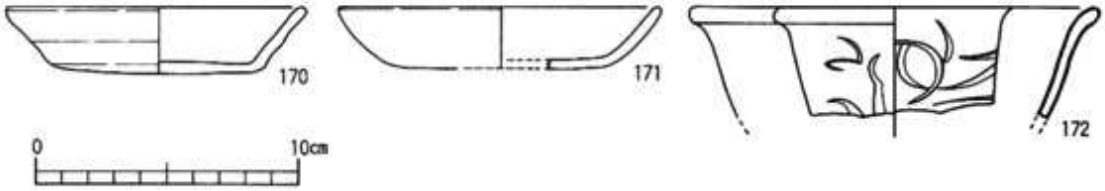
1次A区　SK−12（158〜160）



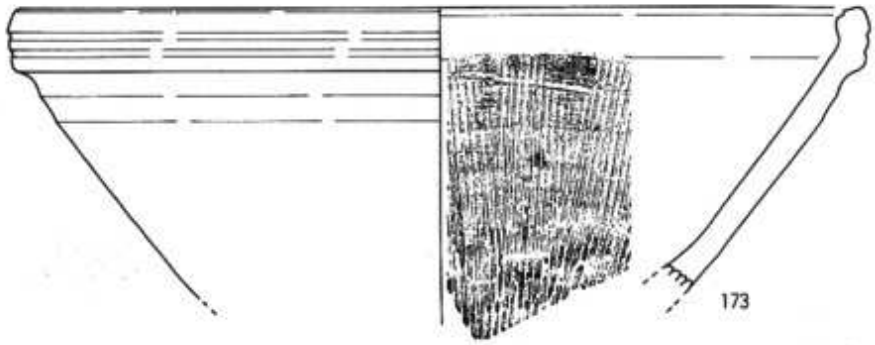
1次A区　SK−15（161〜169）

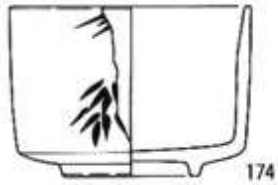


1次A区　SK−16（170〜172）

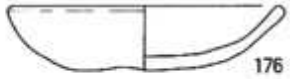


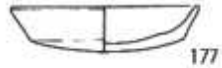
1次A区　SK−27（173〜175）

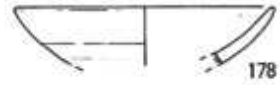




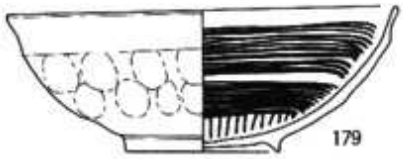
1次A区　SK−28（176〜178）

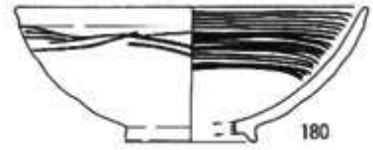


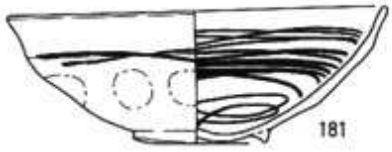


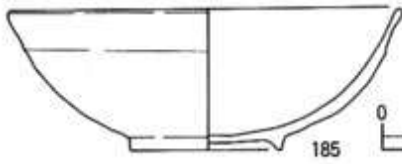


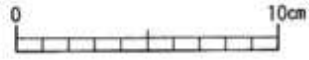
1次A区　SK−35（179〜194）

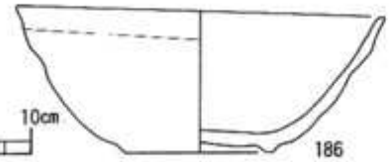


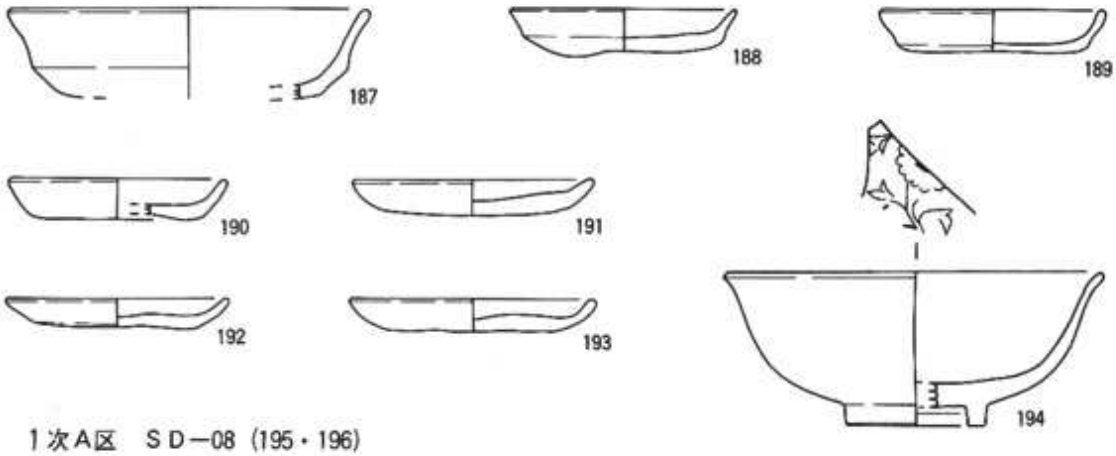




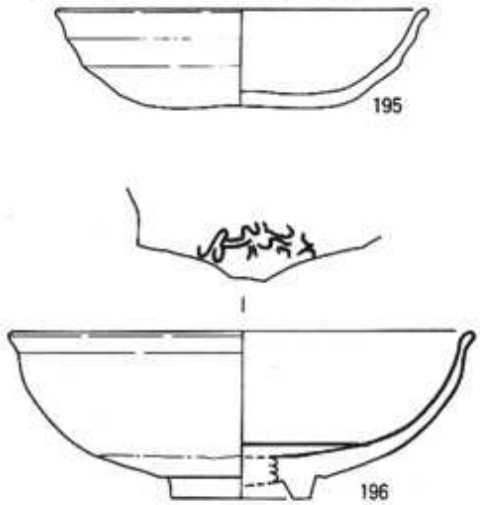




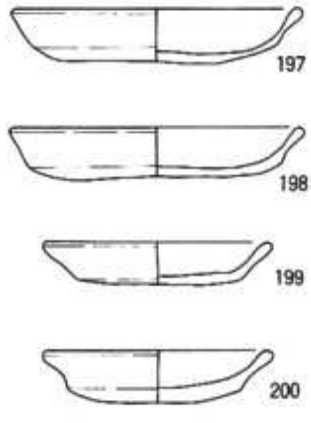




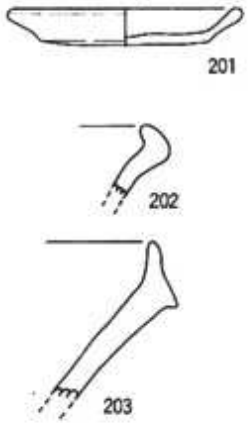
1次A区　SD−08（195・196）



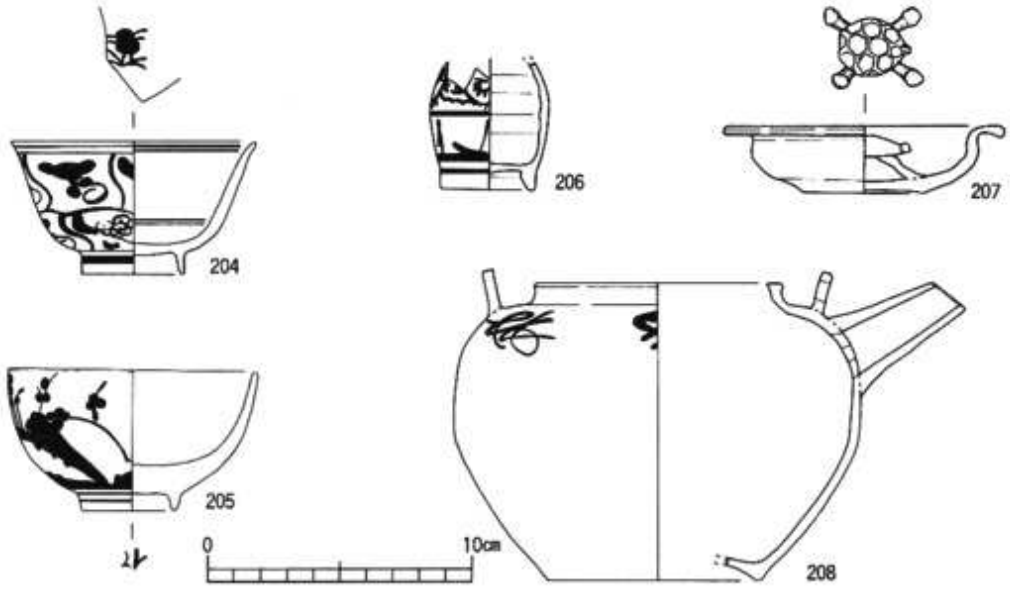
1次A区　SD−12（197〜200）



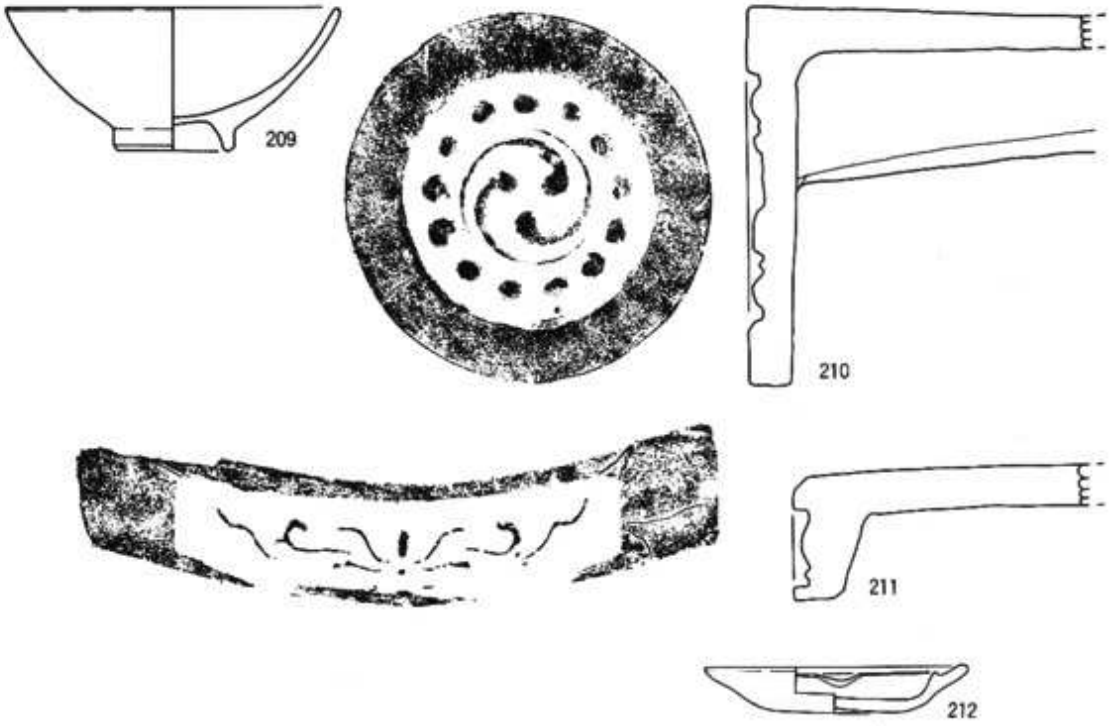
1次A区　SD−15（201〜203）



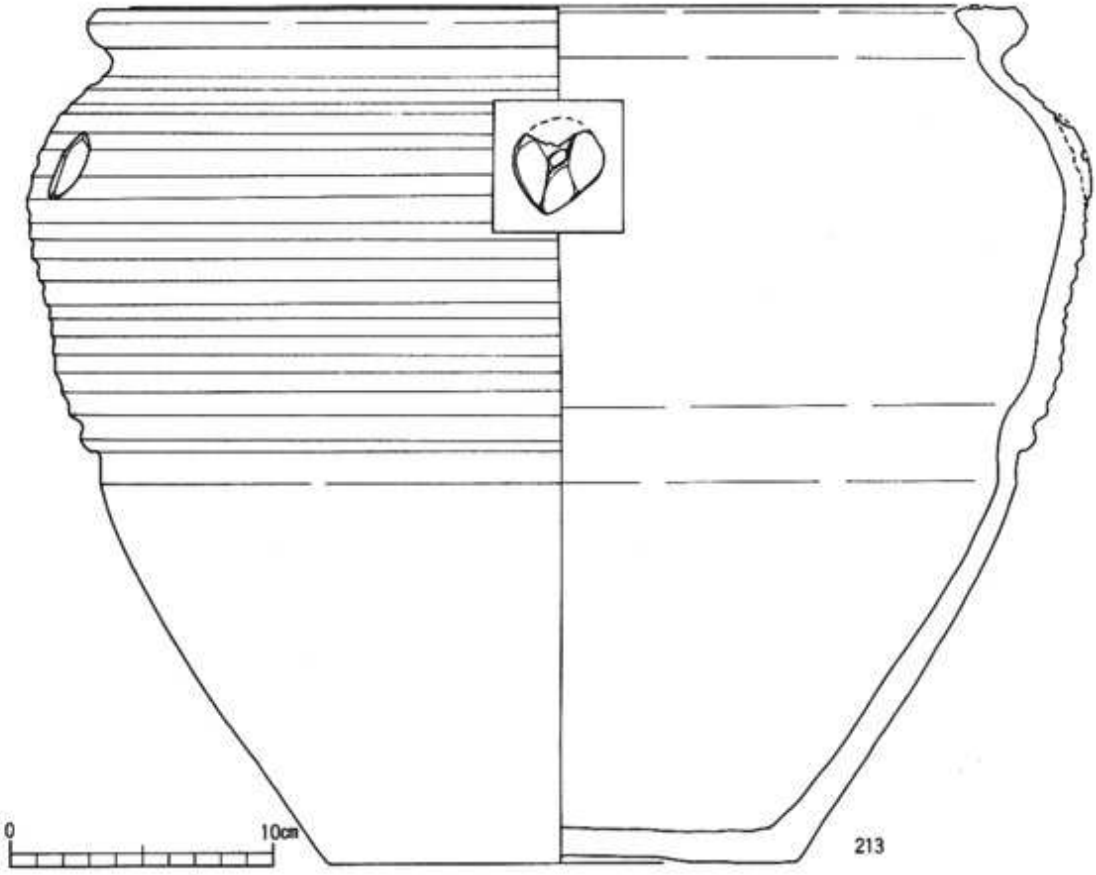
1次A区　SG−01（204〜208）



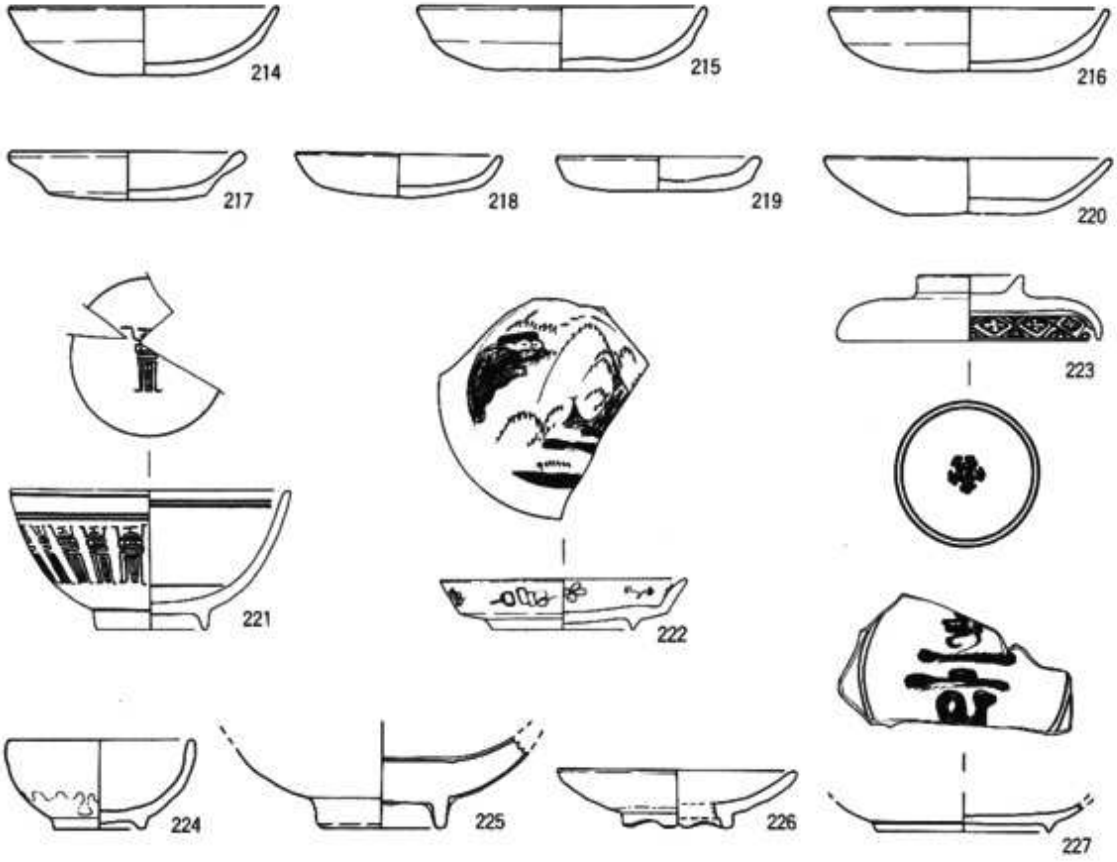
1次A区　ウメオケ－01（209～211）



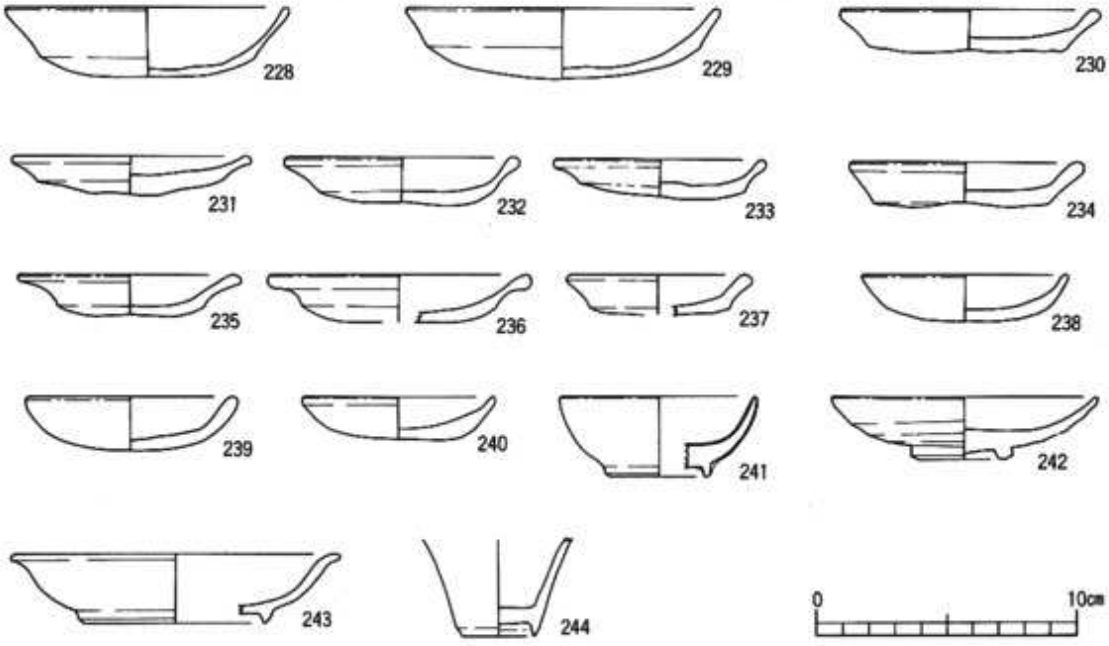
1次A区　ウメガメ－03（212・213）



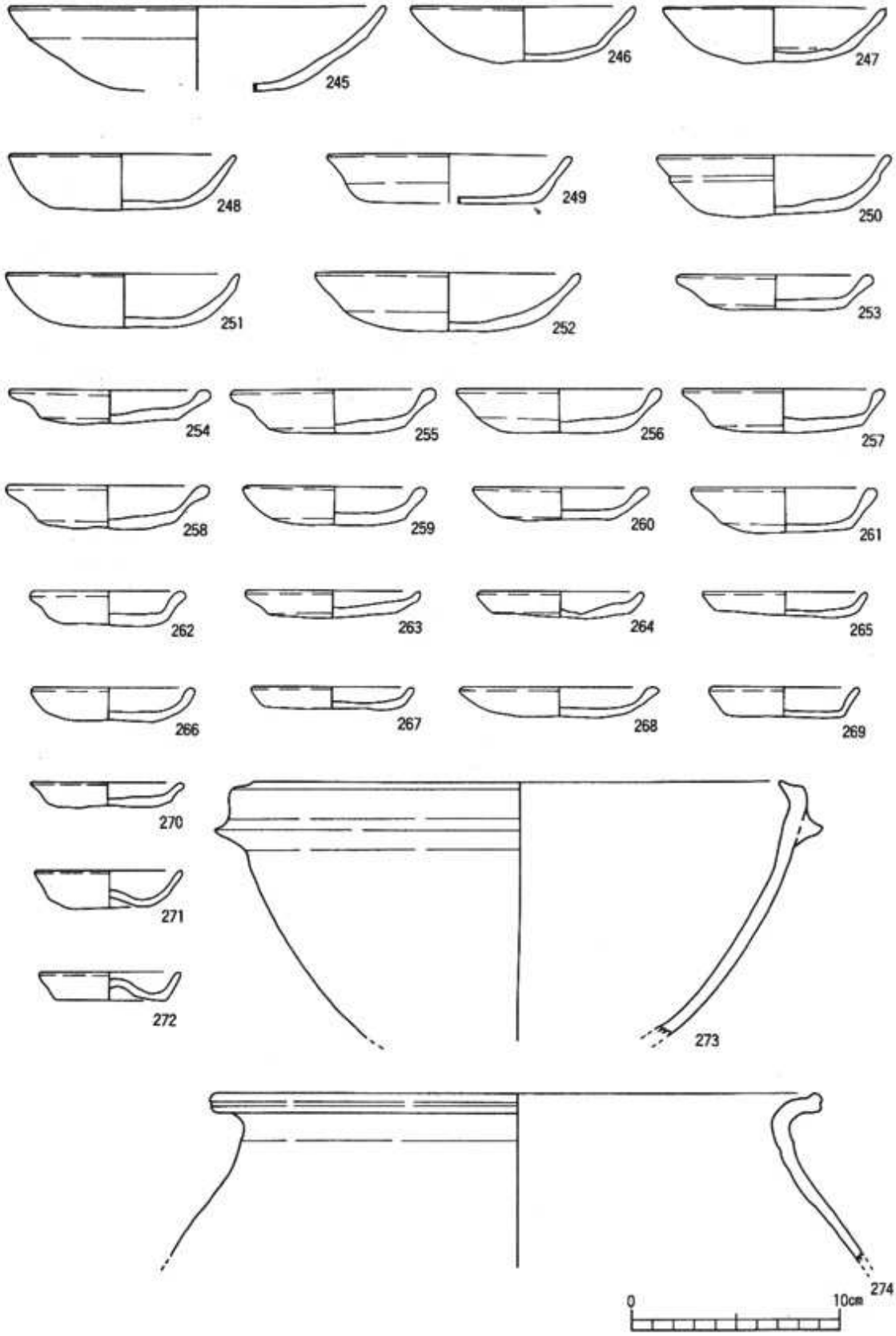
1次B区　表土・床土（214～227）

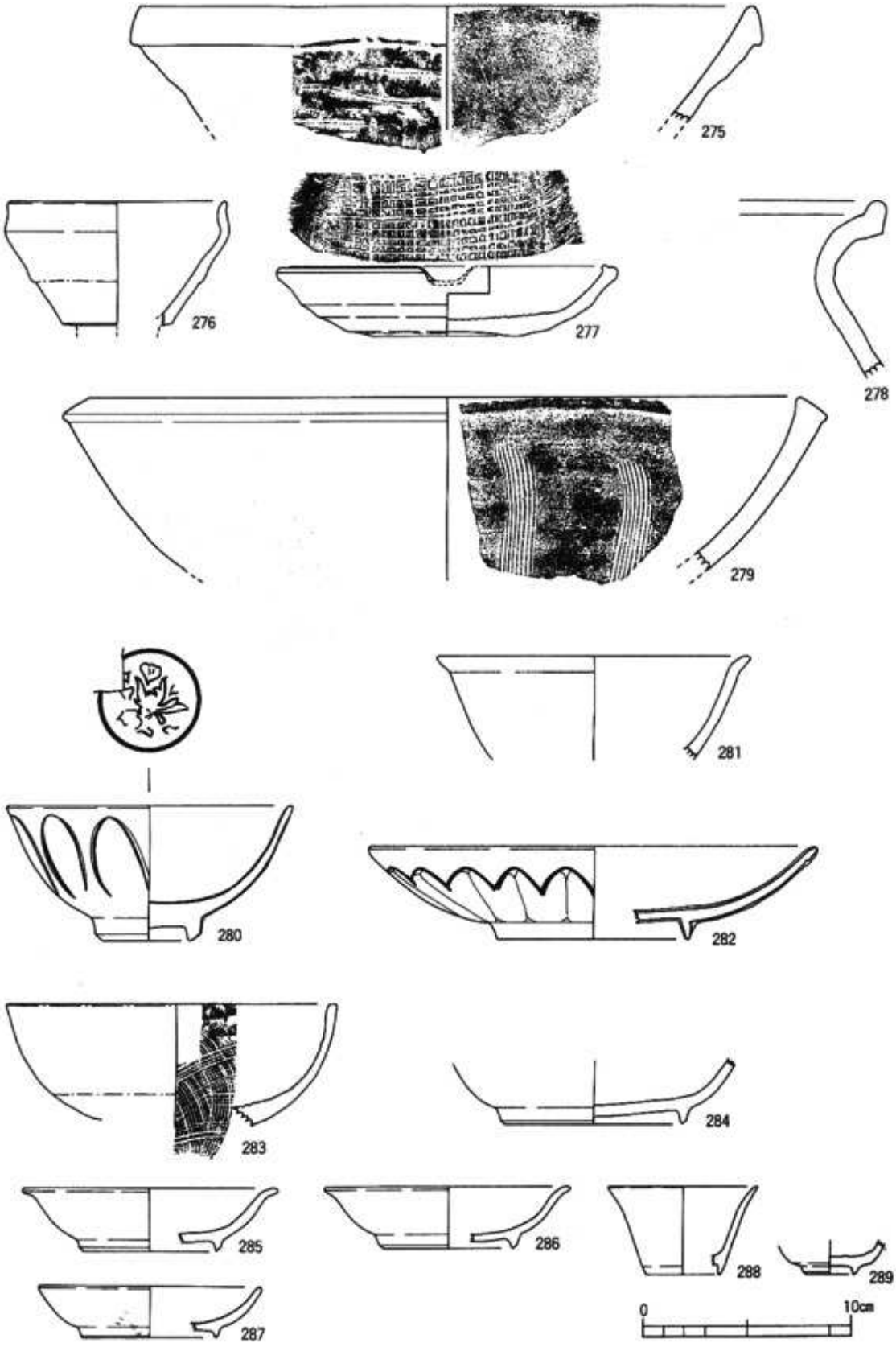


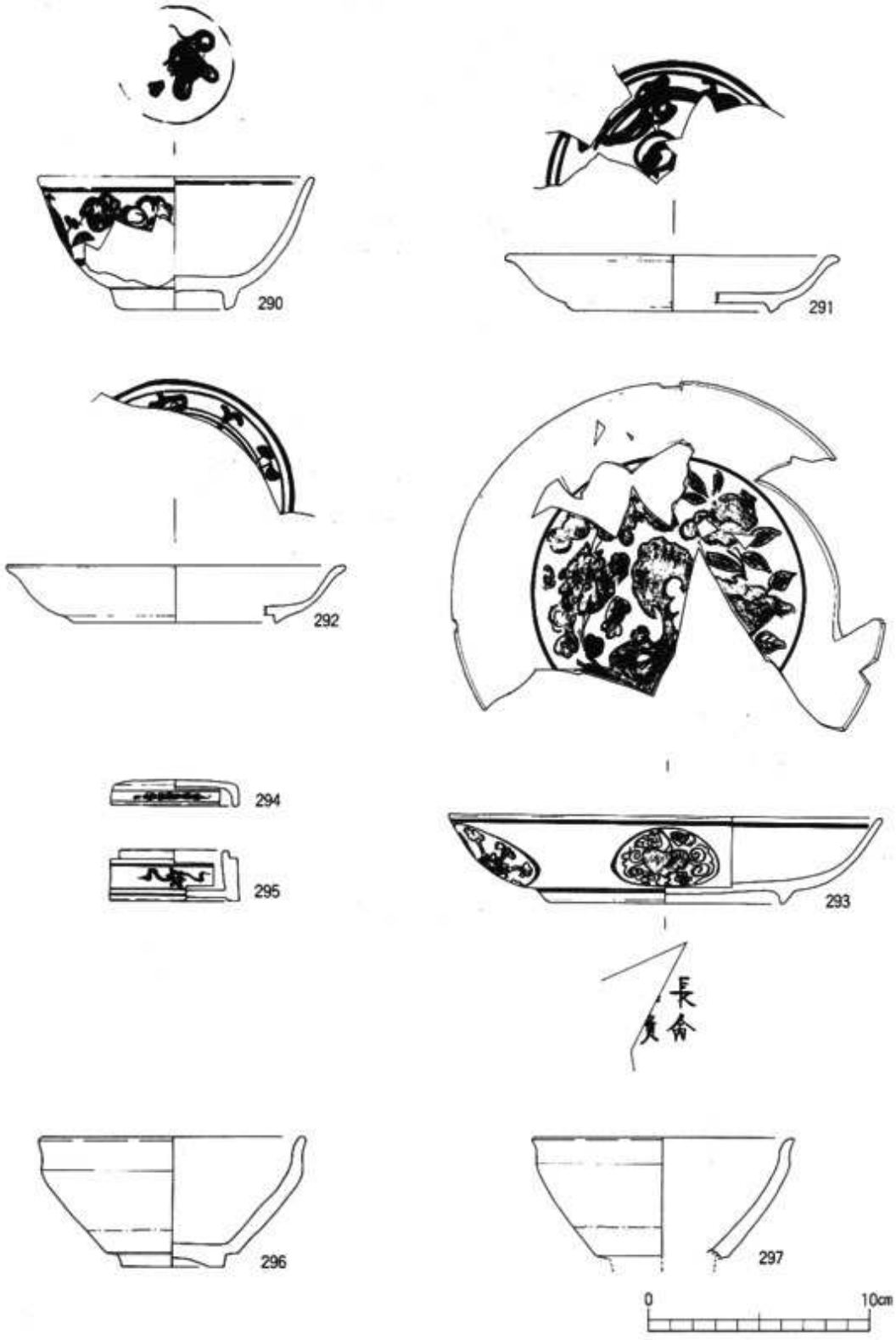
1次B区　第1層（228～244）



1次B区　第2層（245～297）

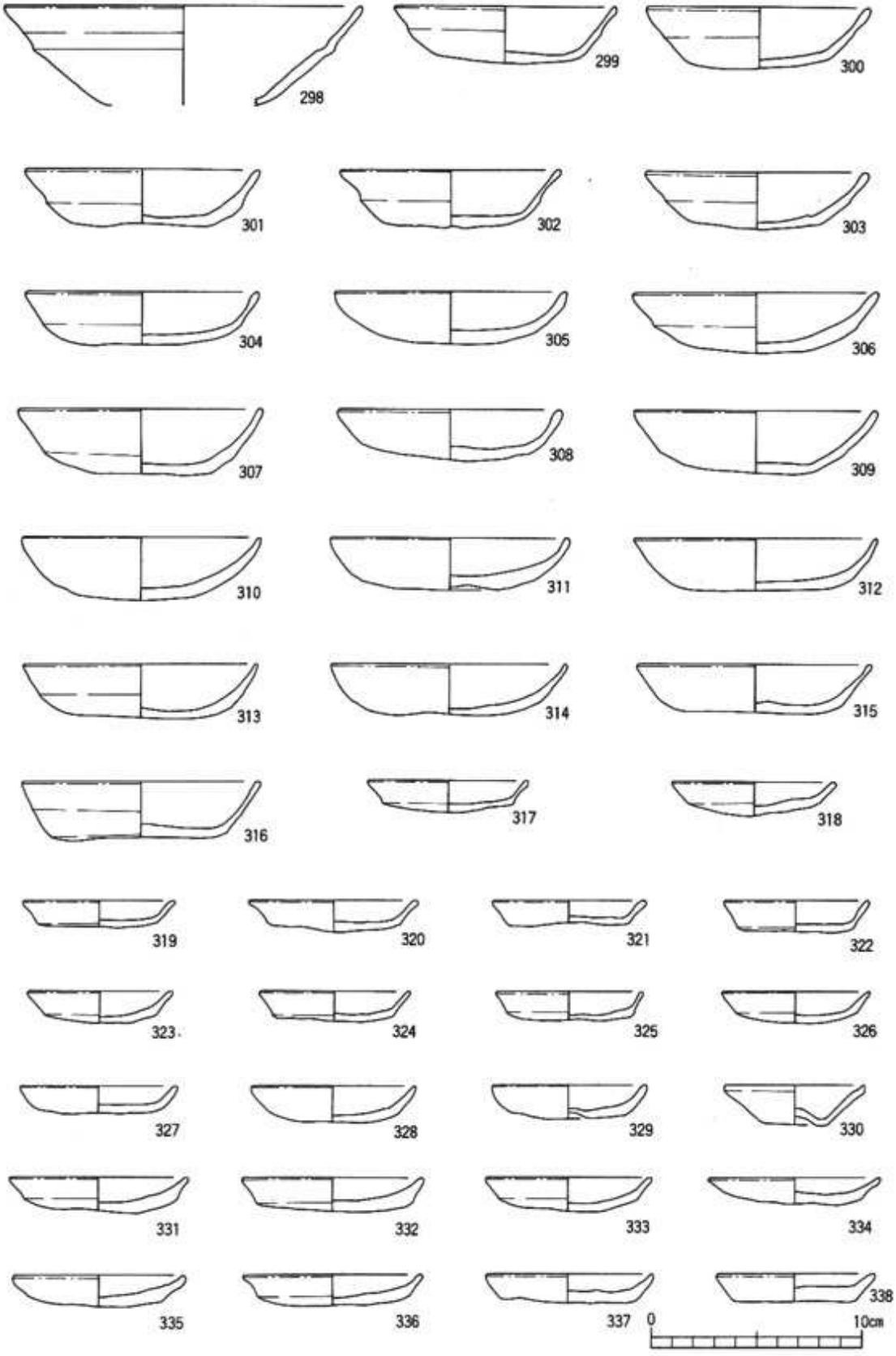


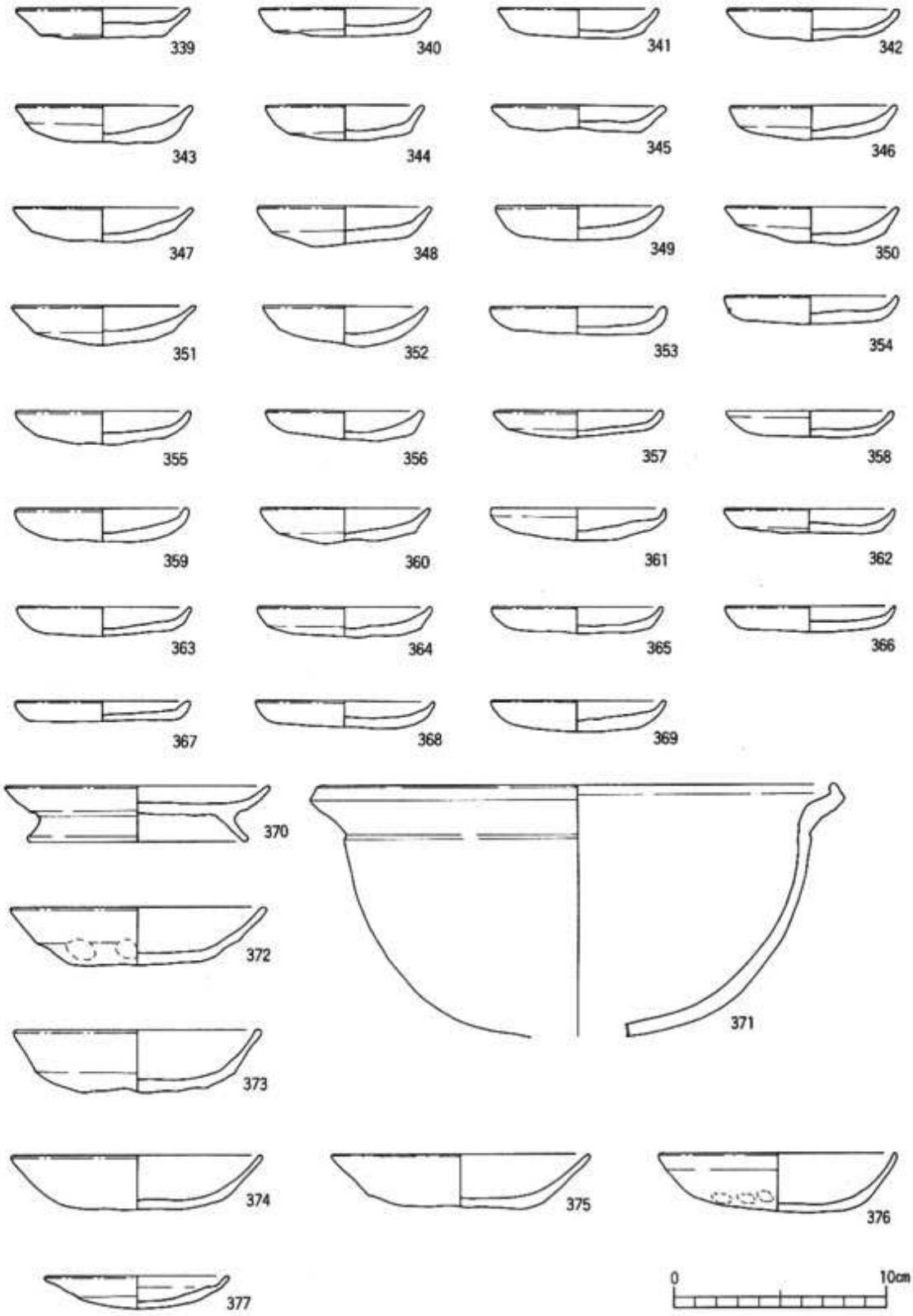

275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
0
10cm

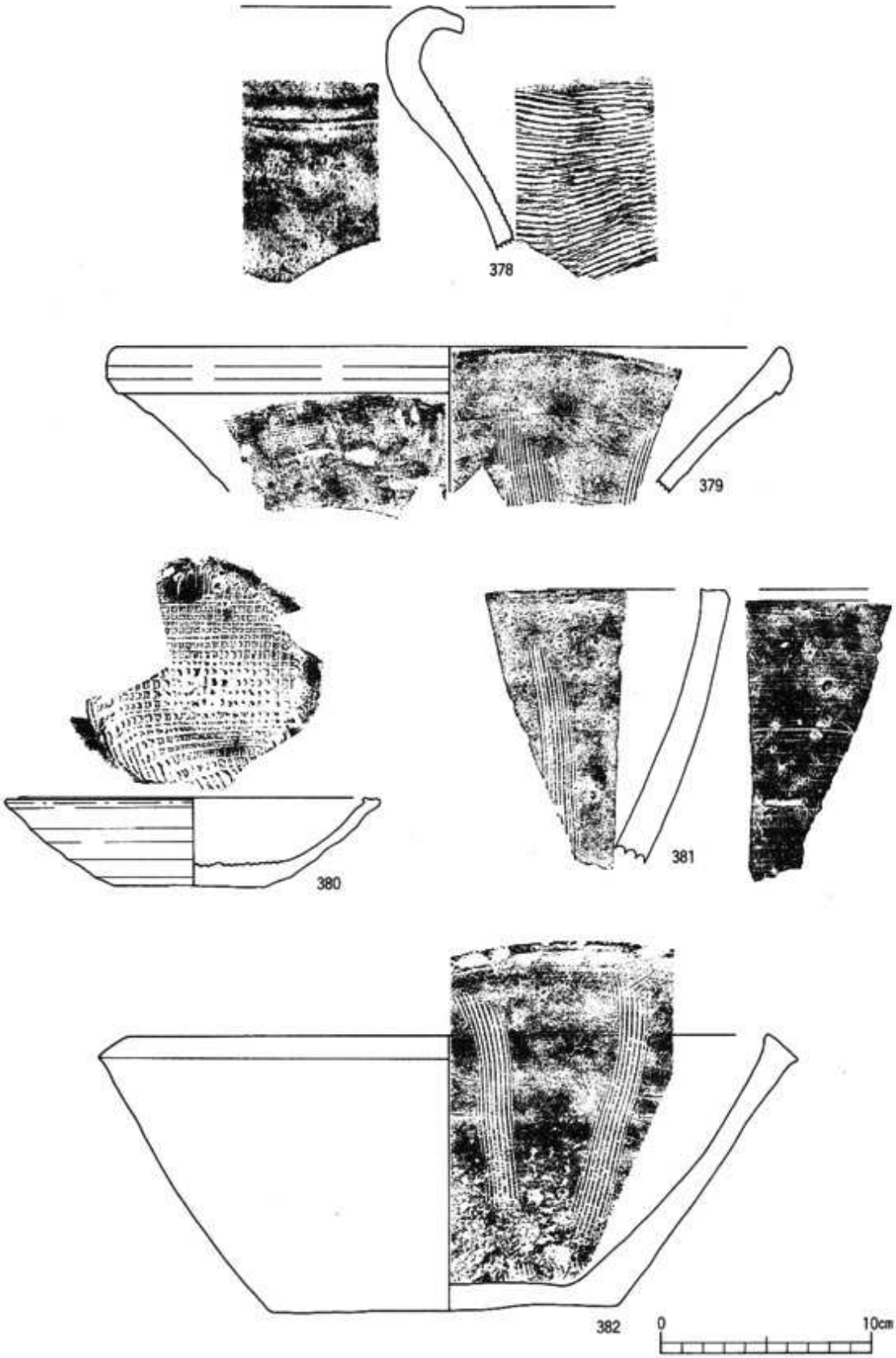

290
291
292
293
294
295
296
297
0
10cm

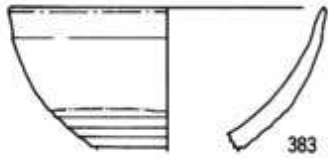
1次B区　第3層（298～384）

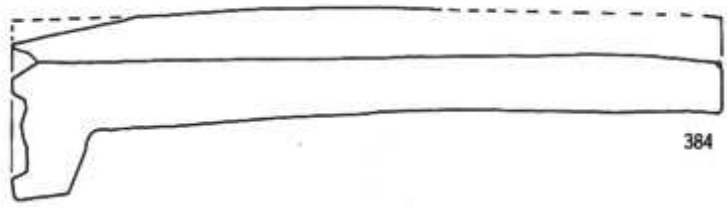
図16



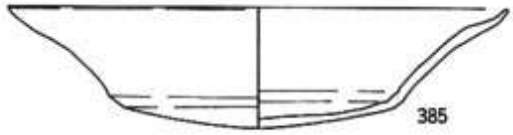

339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
0
10cm

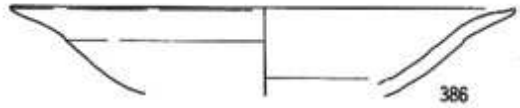

378
379
380
381
382
0
10cm

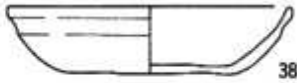


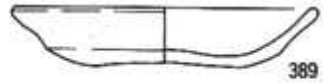


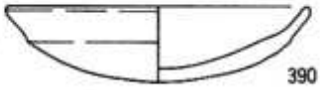
1次B区　SD−01上層（385〜403）

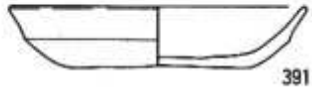


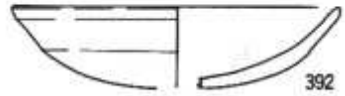


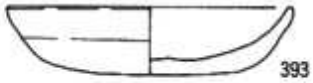


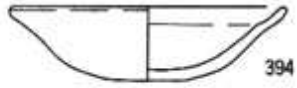


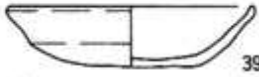


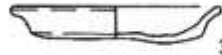


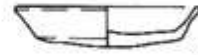


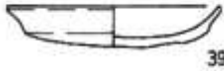


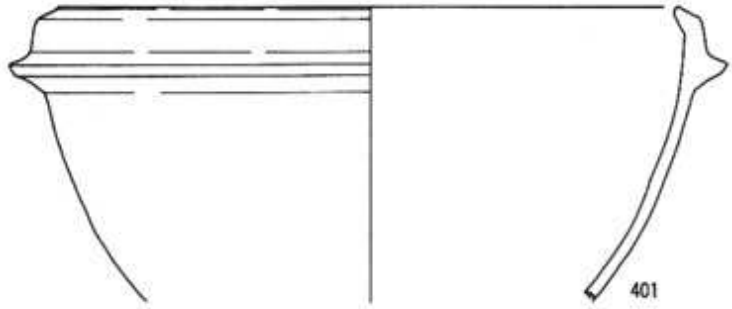


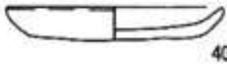


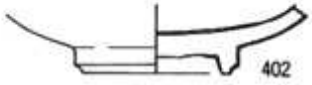


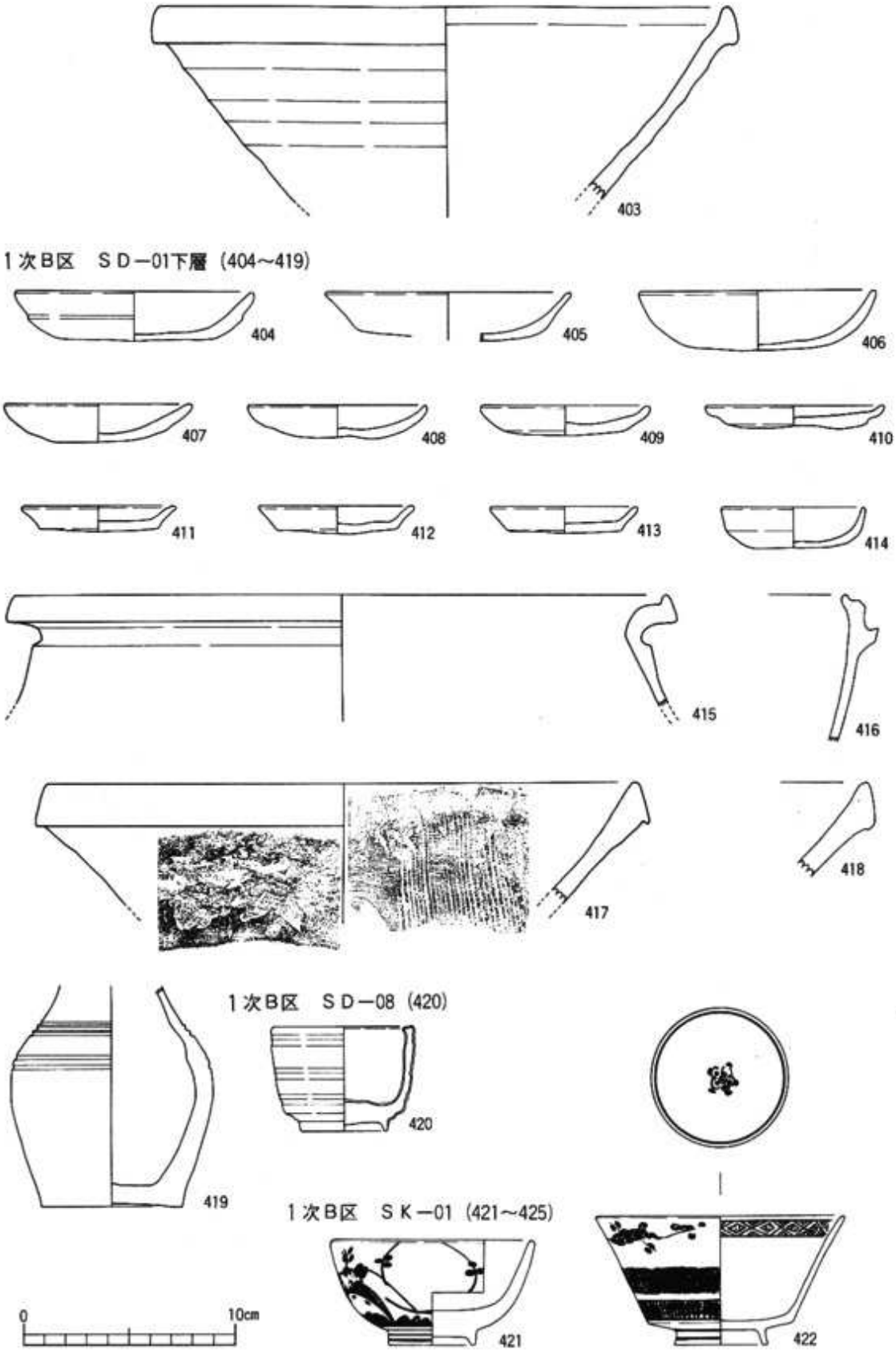


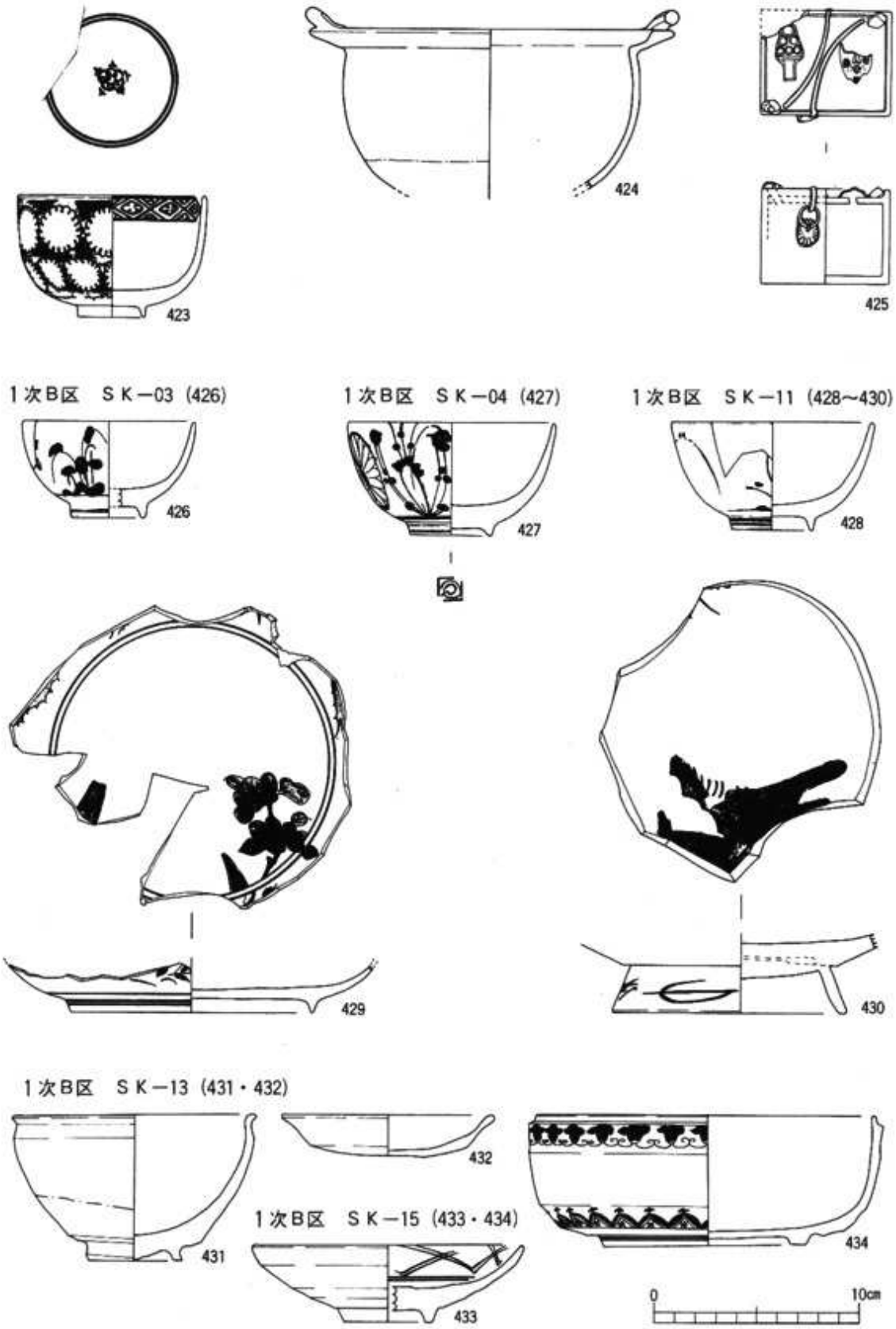




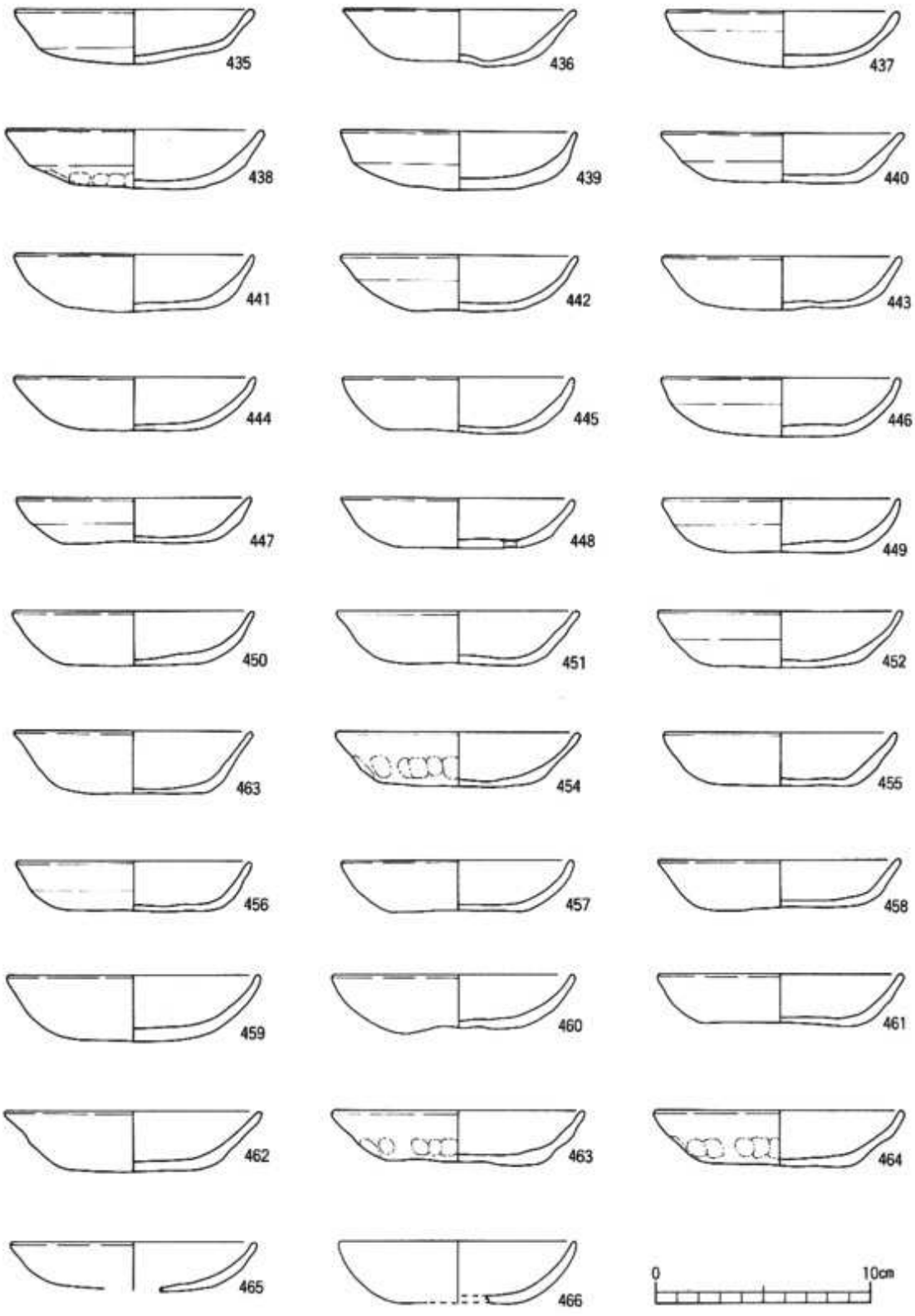





403
1次B区　SD−01下層（404〜419）
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
1次B区　SD−08（420）
420
419
1次B区　SK−01（421〜425）
421
422
0
10cm


423
424
425
1次B区　SK−03（426）
426
1次B区　SK−04（427）
427
1次B区　SK−11（428〜430）
428
429
430
1次B区　SK−13（431・432）
431
432
1次B区　SK−15（433・434）
433
434
0
10cm

1次B区　土器溜（435～513）



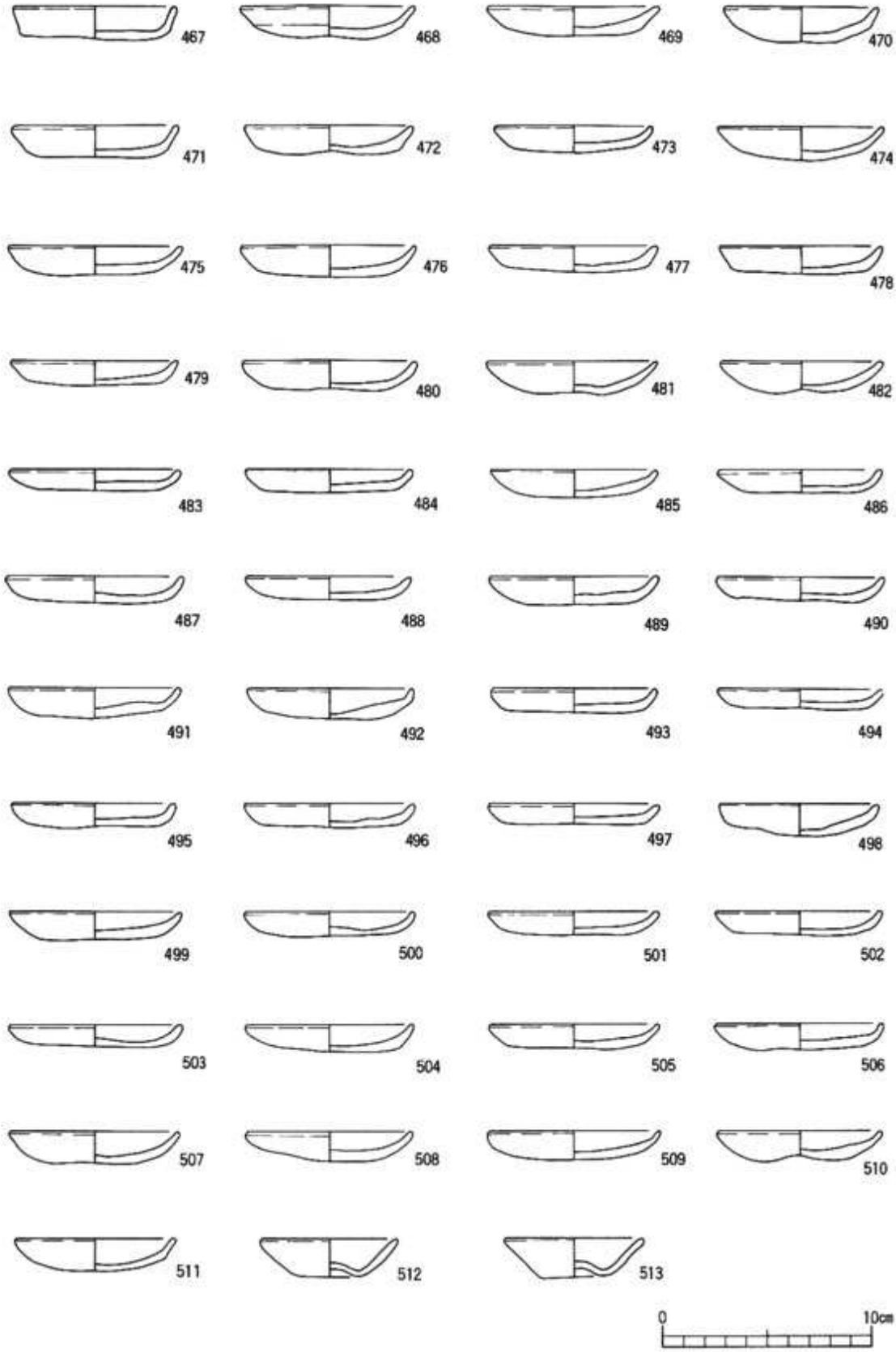
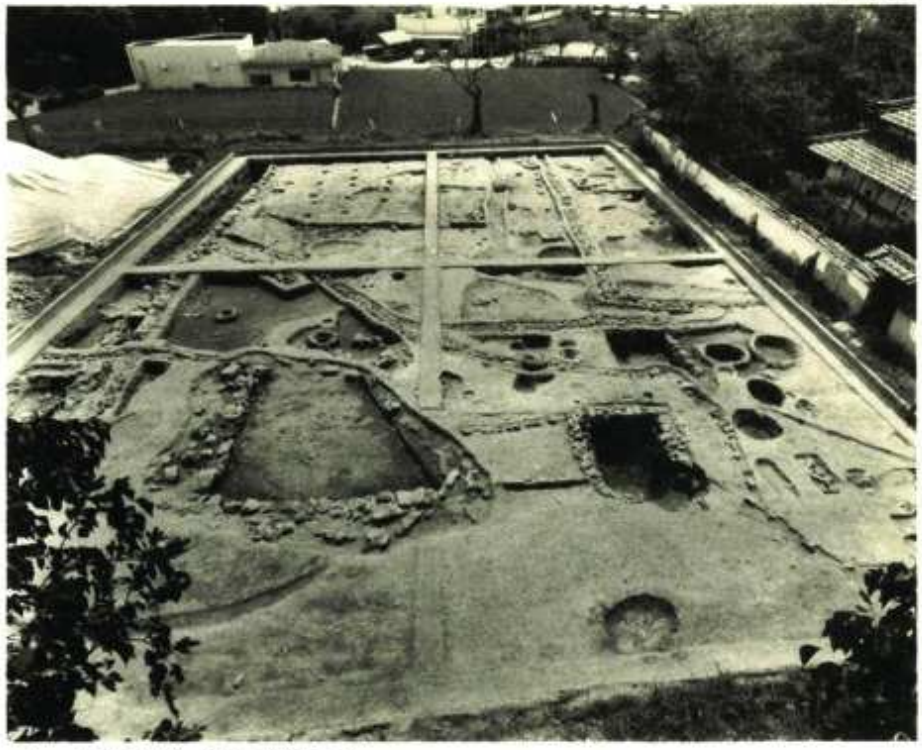
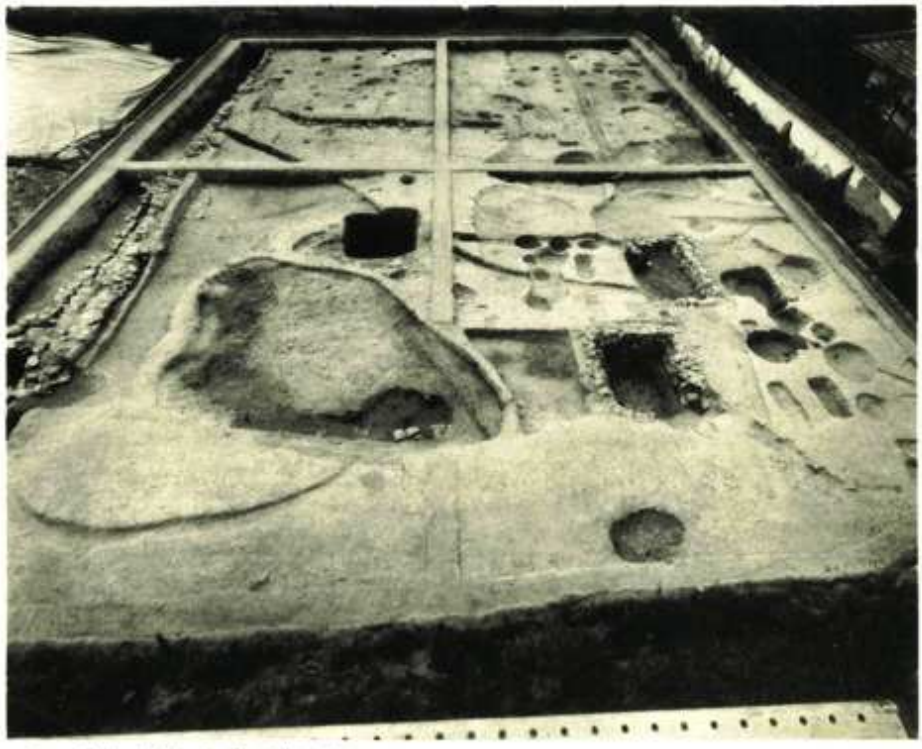

467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
0
10cm

図　版



1　1次A区　全景（北から）



2　1次A区　全景（北から）

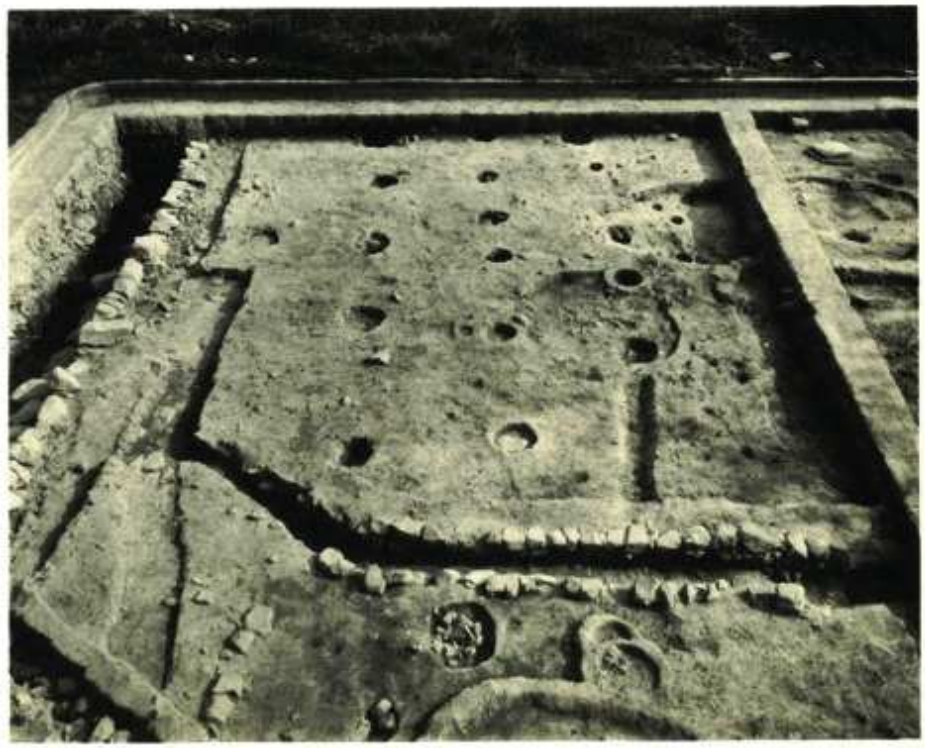
1　1次A区　SG—01（西から）

2　1次A区　SF—01（東から）

1　1次A区　SV—01（南から）

2　1次A区　SD—15（南から）

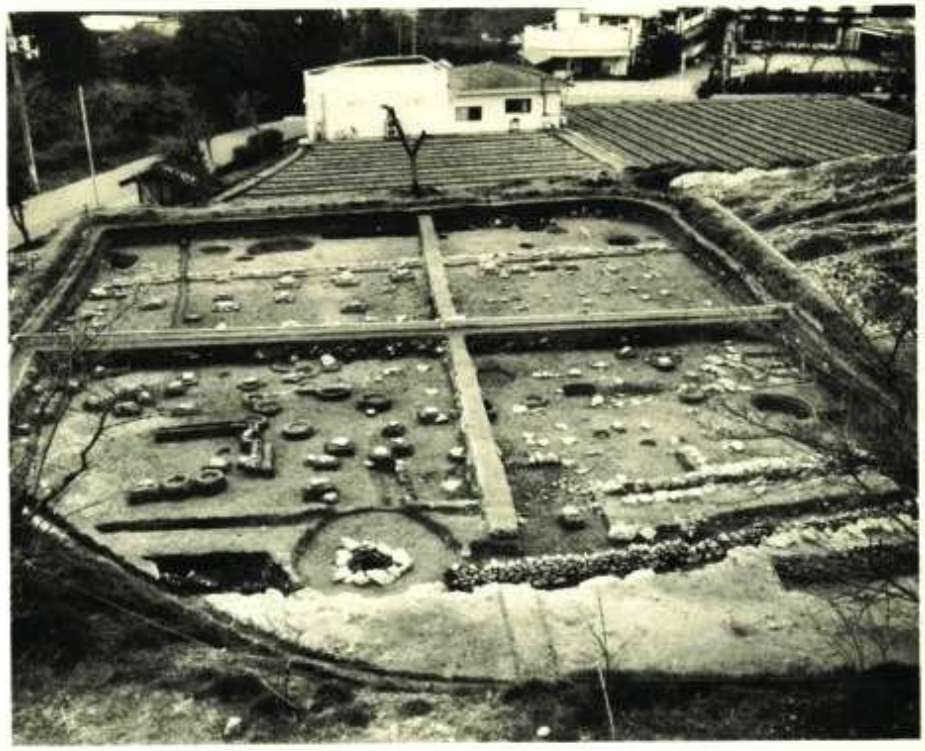
1　1次A区　SE—01（北から）



2　1次A区　SB—01（北から）

1　1次B区　全景（上方から）

2　1次B区　全景（上方から）



1　1次B区　全景（北から）

2　1次B区　SE—01（東から）

1　1次B区　瓦列（南から）

2　1次B区　SD—08（西から）

1　1次B区　SD—01（西から）

2　1次B区　土器溜（西から）

6

7

1001

1002

8

9

10

11

12

13

14

1003

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44 45

46

47

1004

48

49

50

51

52

53

54

55

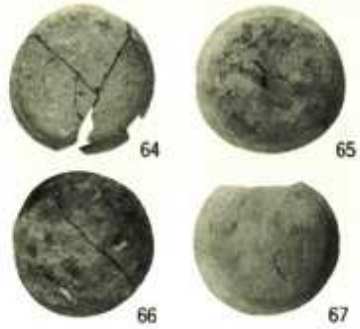
56

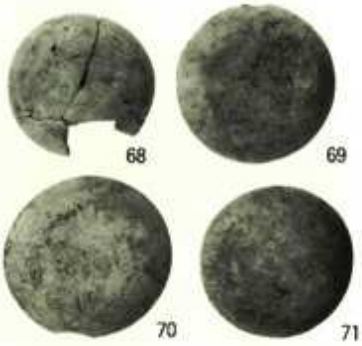
57

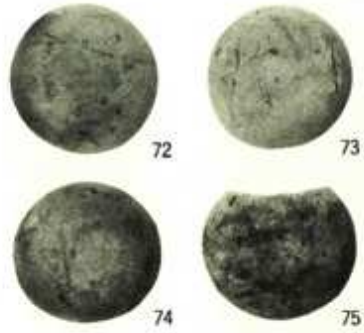
58

59

60 61 62 63

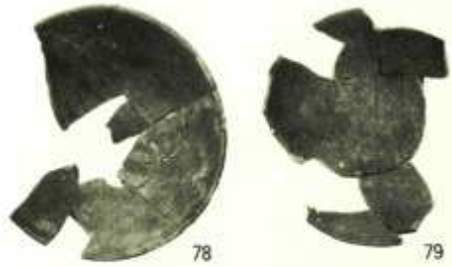

64 65 66 67


68 69 70 71

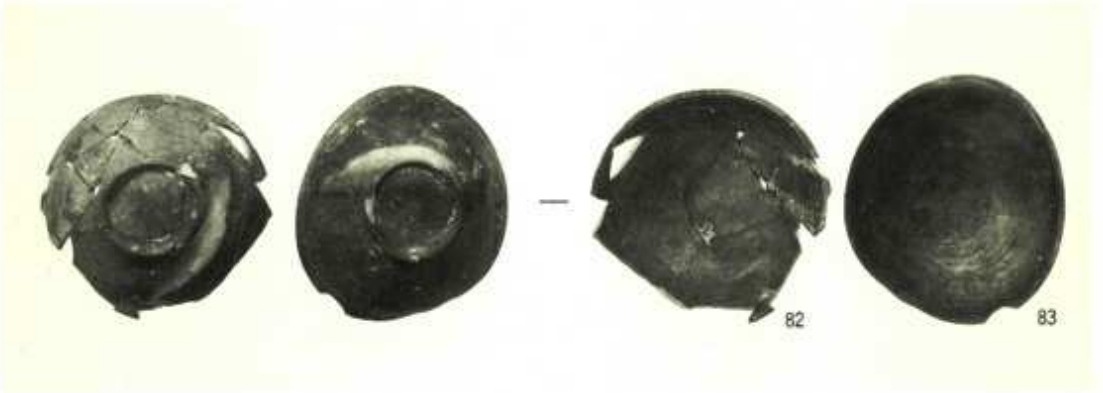

72 73 74 75

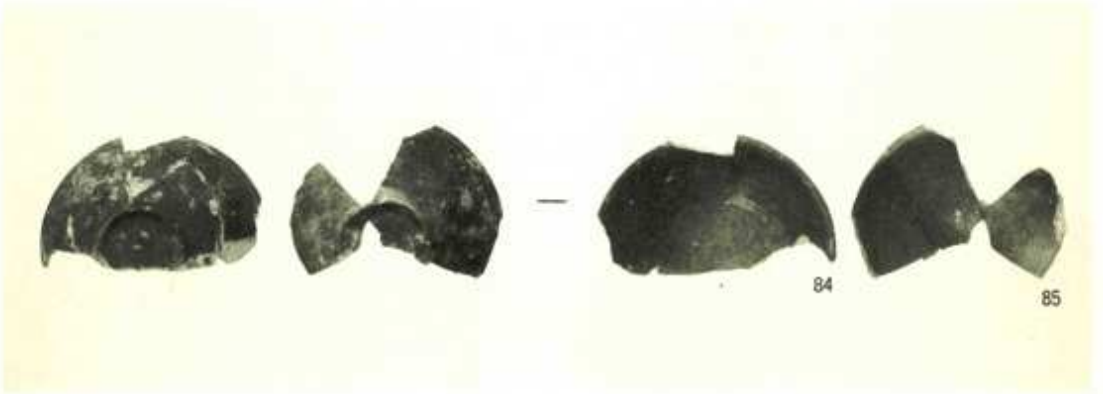
76

77


78 79

80
81


82
83


84
85

86
87

88
89

90
91

92
93

94
95
96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

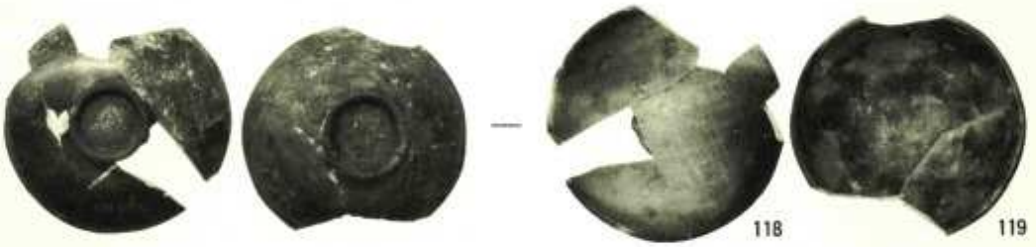
112

113

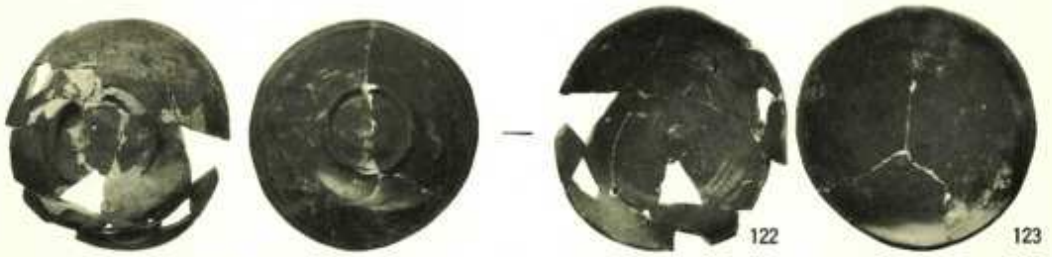
114

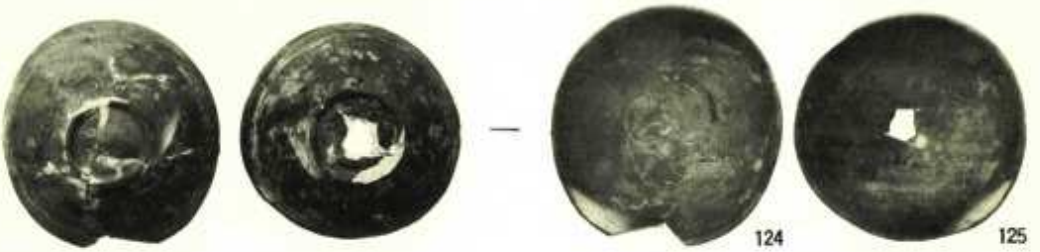
115

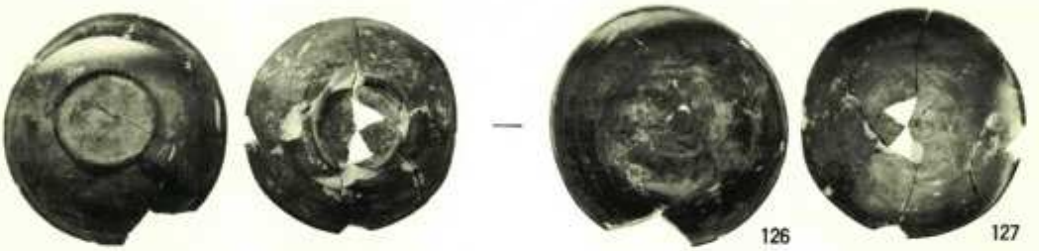
116
117


118
119

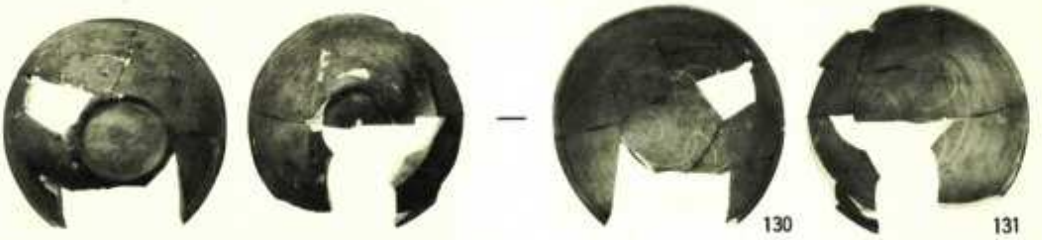
120
121

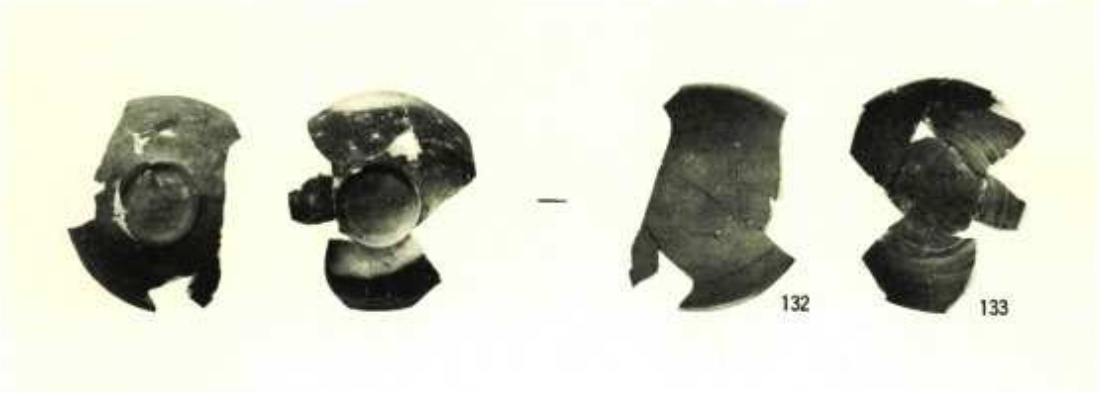

122
123

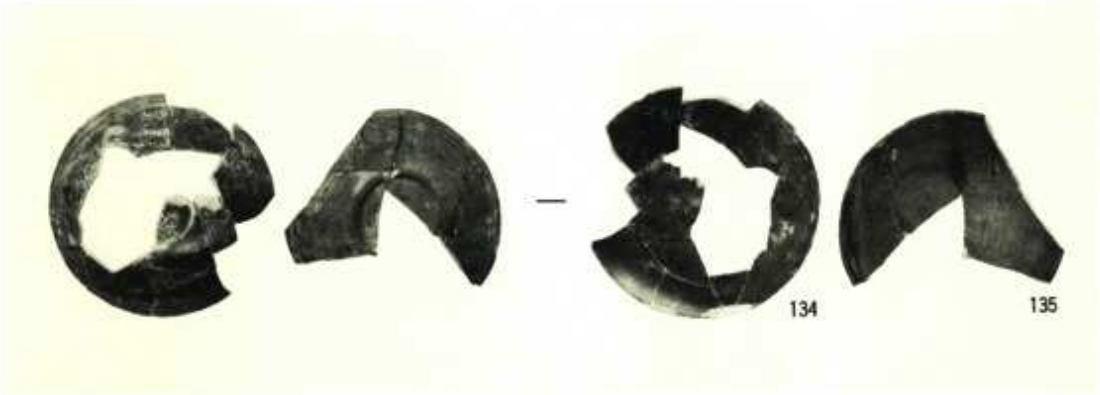

124
125

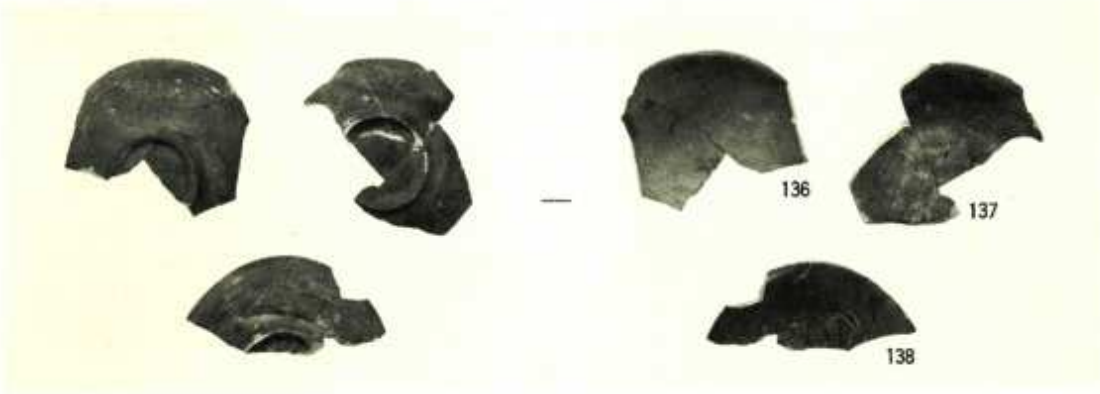

126
127

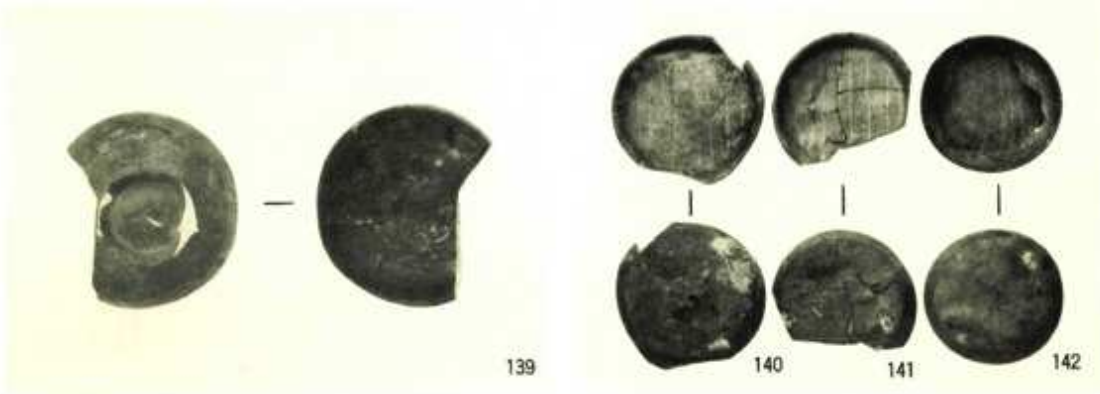
128
129

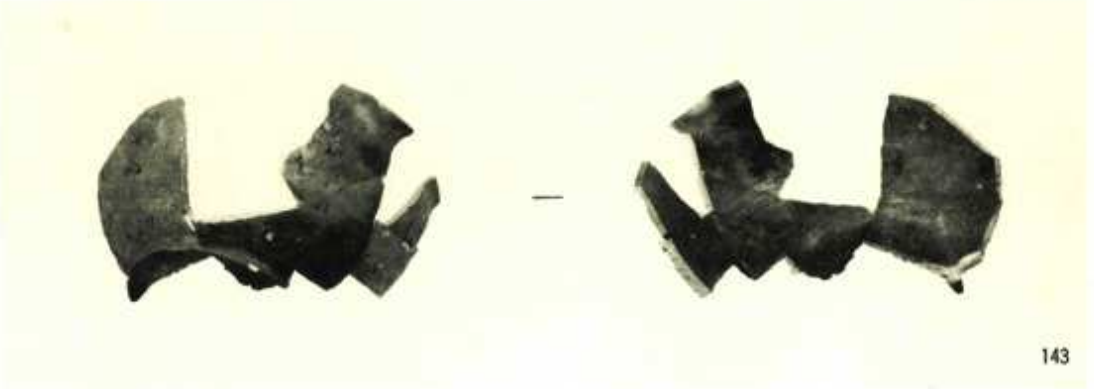

130
131


132
133


134
135

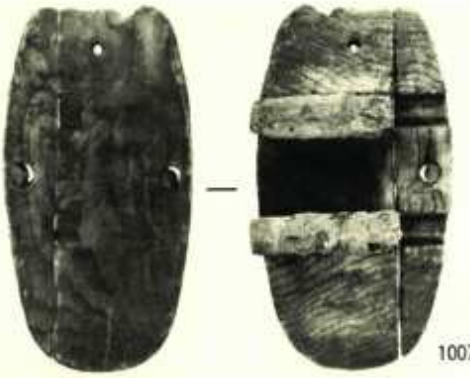

136
137
138

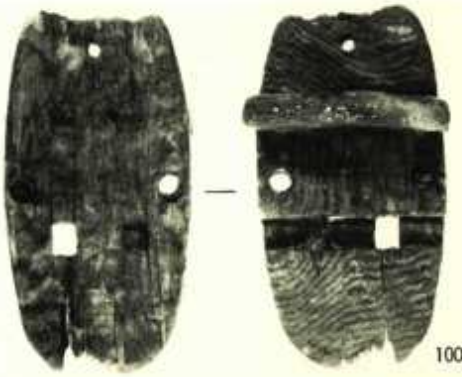

139
140
141
142

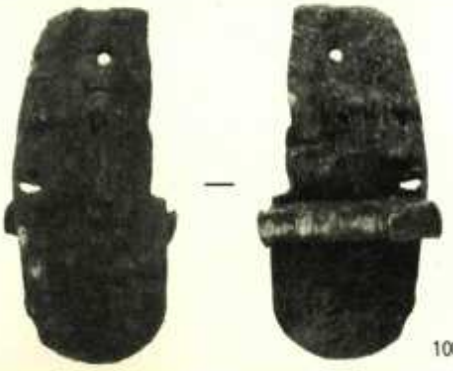

143

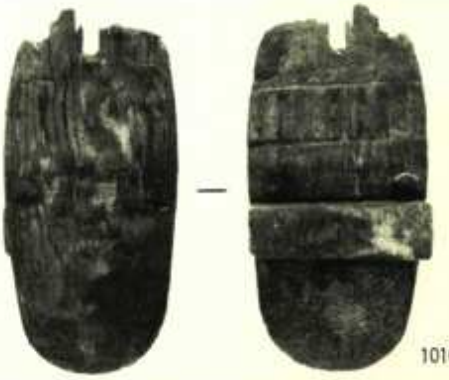
1005

1006


1007


1008

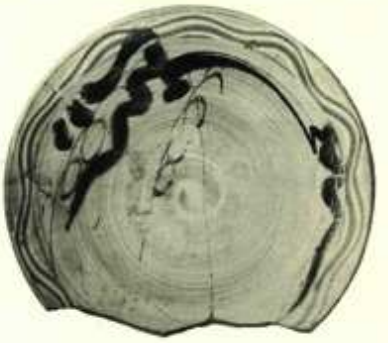

1009


1010

1011

144

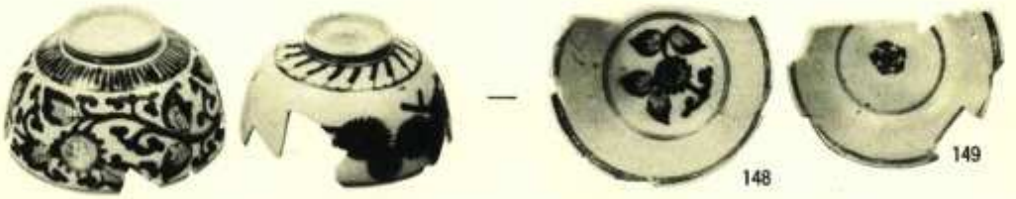
145



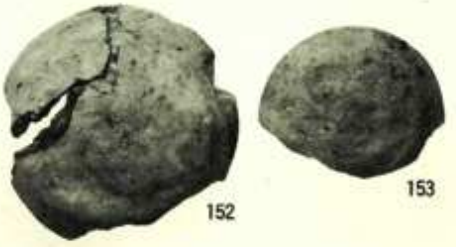
146

147

150

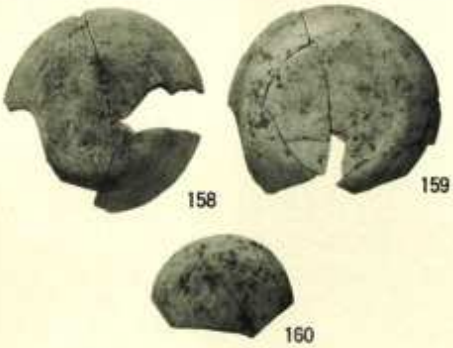

148
149

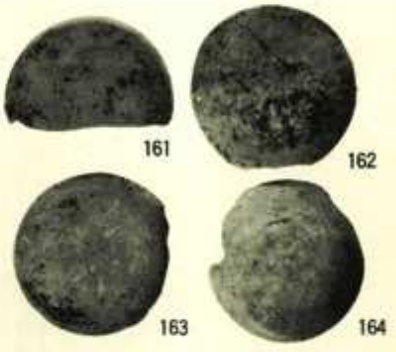
151

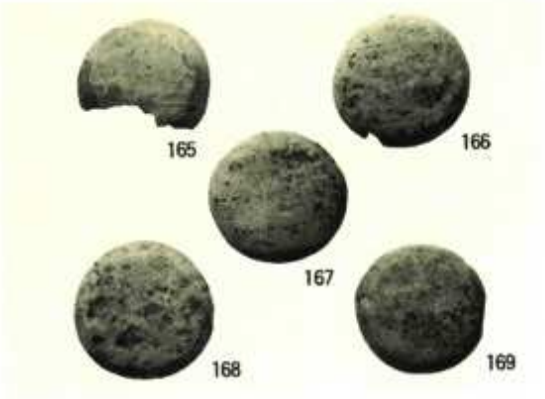

152
153

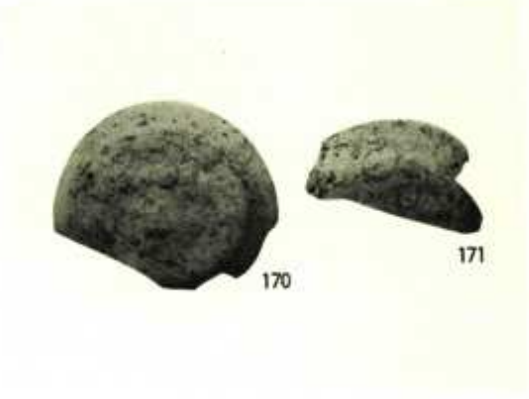
154

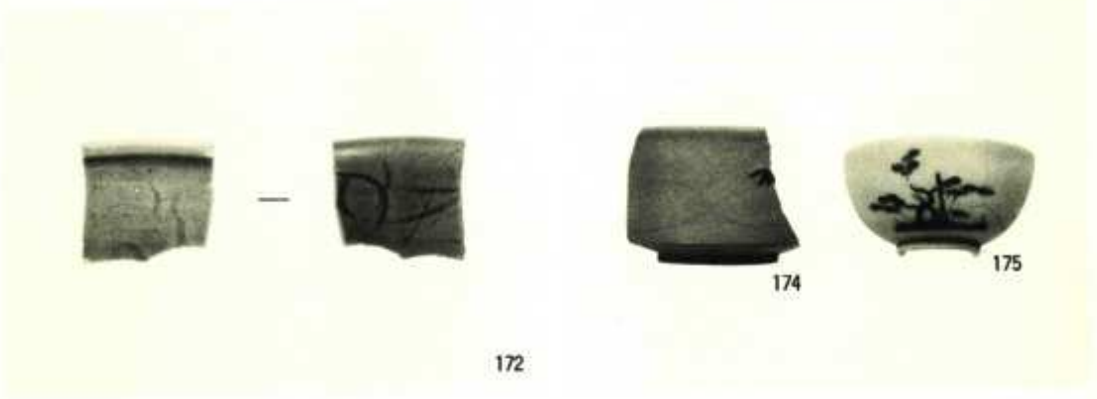
155
156
157

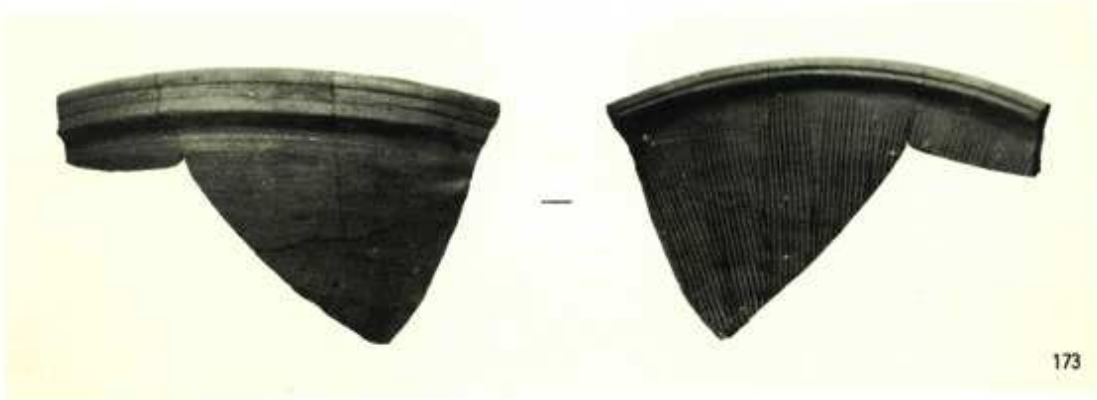

158
159
160

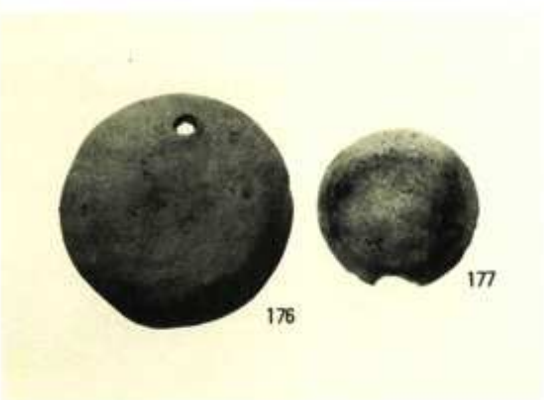

161
162
163
164


165
166
167
168
169


170
171


174
175
172


173

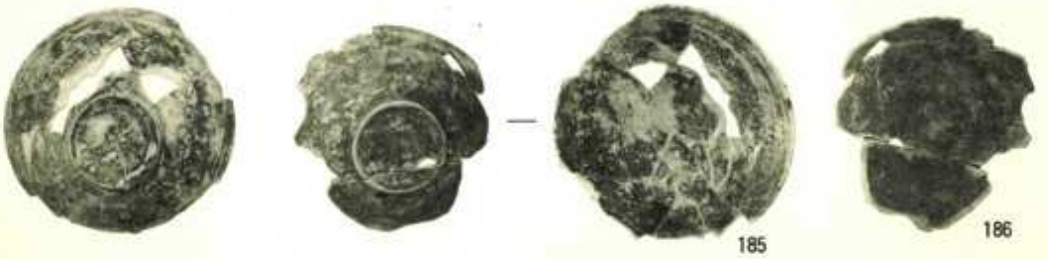

176
177

178

179
180

181
182

183
184


185
186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

—

203

—

204

205

206

207

208

209

210

211

213

212

214

215

216

217

218

219

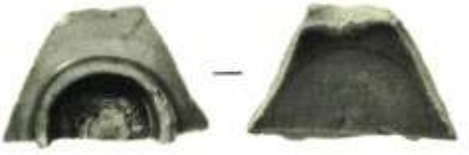
220

221

222

223

224



225

226

227

228

229

230

231

232

233

234 235

236 237

238 239 240

241

242

243

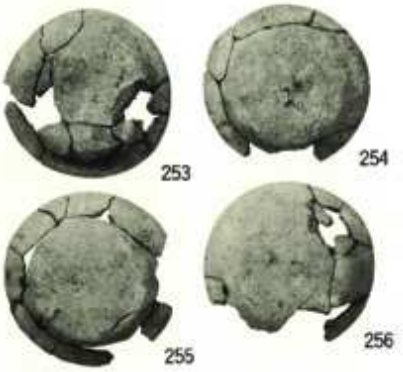
244

245

246 247

248
250
249

251
252


253
254
255
256

257
258
259
260

261
262
263
264

265
266
267
268

269
270
271
272

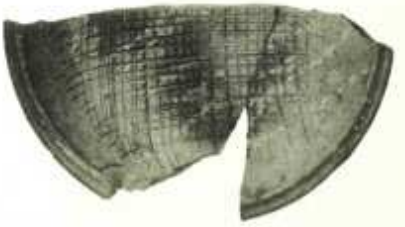
273

274

275

276

278



277

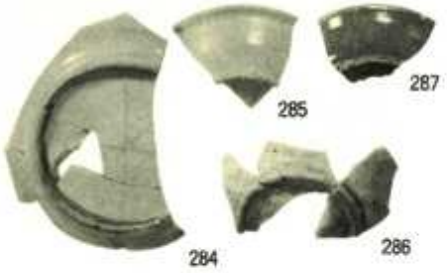
279

280

281

282

283

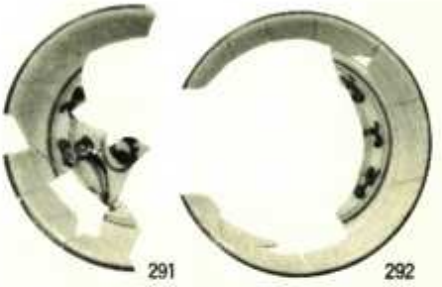

285
287
284
286

288

289

290

294
295


291
292

293

296

297

298

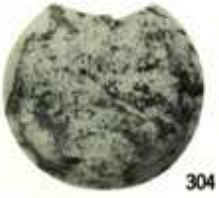
299

300

301

302

303


304

305

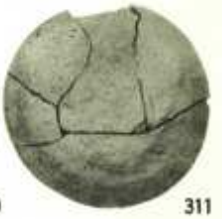
306

307

308

309

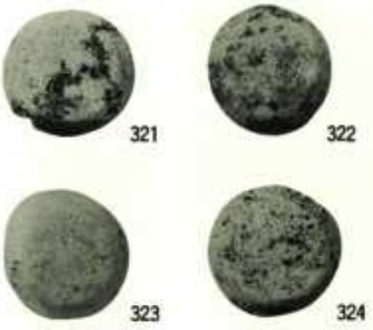
310


311

312 313

314 315 316

317 318 319 320

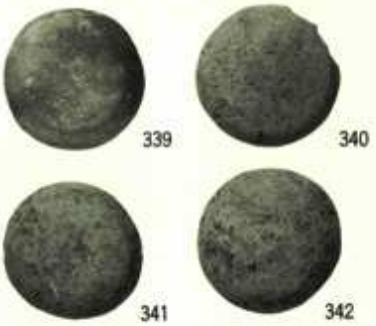

321 322 323 324

325 326 327 328

329 330

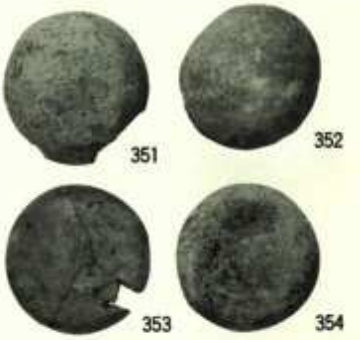
331 332 333 334

335 336 337 338

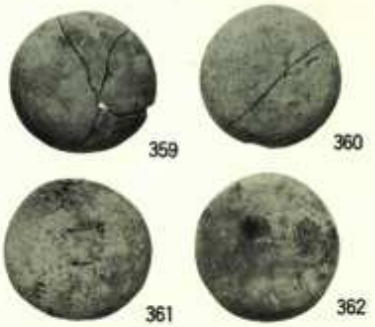

339
340
341
342

343
344
345
346

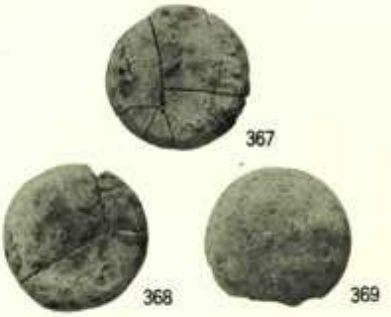
347
348
349
350


351
352
353
354

355
356
357
358


359
360
361
362

363
364
365
366


367
368
369

370

372

373

371

374

375

376

377

378

379

380

381

382

383

384

385

386

387

388

389

390

391

392

393

394

395

396

397

398

399

400

401

402

403

405

404

406

407

410

408

409

411

412

413

414

417

418

415

416

419

420

422

423

421

424

425

426

427

428

429

430

431

432

433

434

435

436

437

438

439

440

441

442

443

444

445

446

447

448

449

450

451

452

453

454

455

456

457

458

459

460

461

462

463

464

465

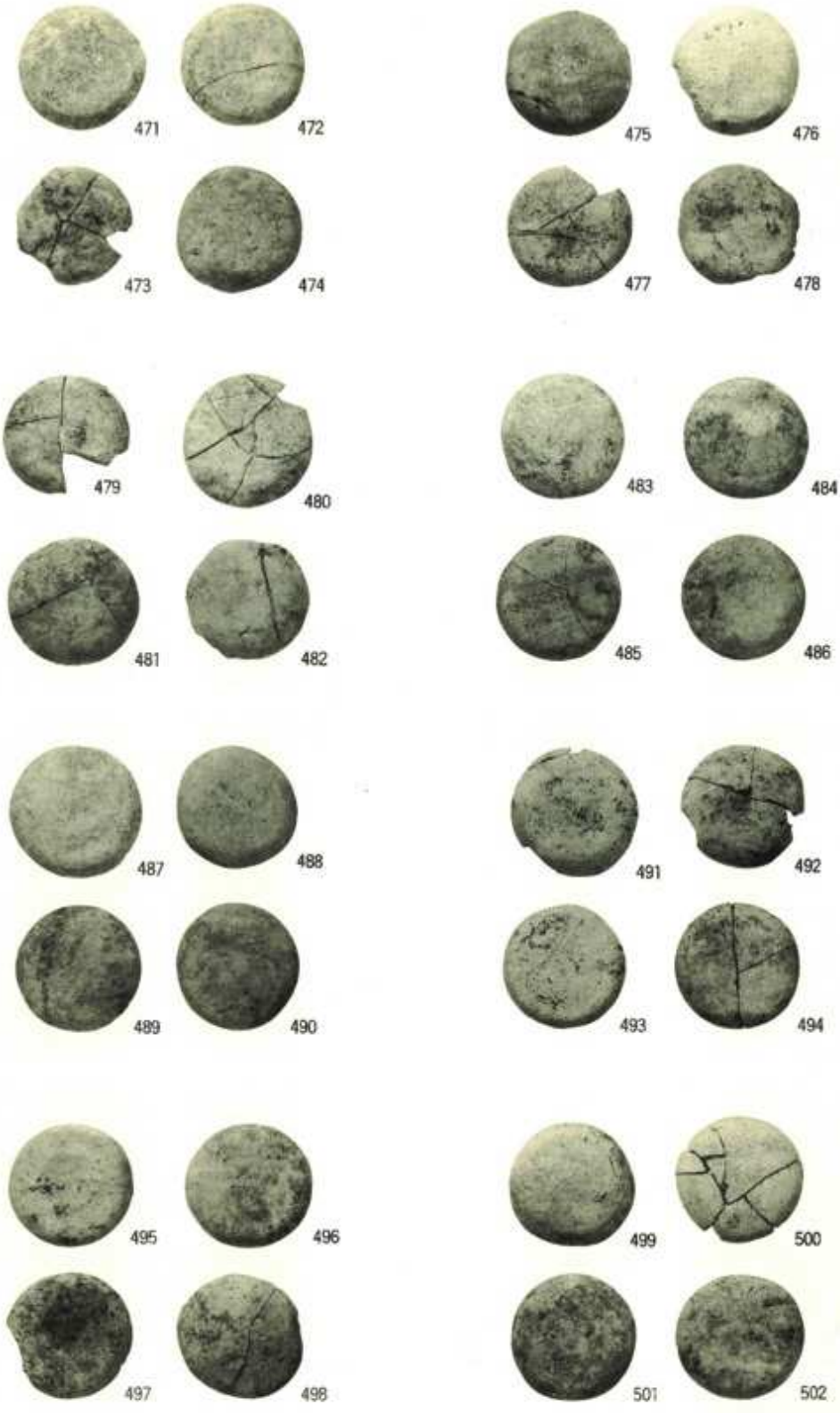
466

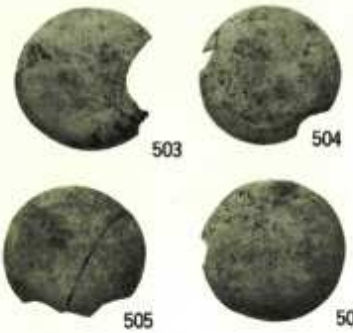
467

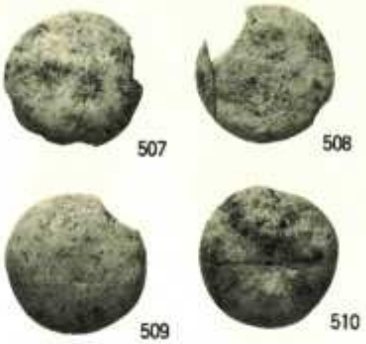
468

469

470


471
472
475
476
473
474
477
478
479
480
483
484
481
482
485
486
487
488
491
492
489
490
493
494
495
496
499
500
497
498
501
502


503 504 505 506


507 508 509 510

511 512 513

1013 1014

1015 1016

1017 1018

1019

昭和60年度
根来寺坊院跡
編集　和歌山県教育委員会
発行　和歌山県教育委員会
印刷　真　陽　社